

江戸名所圖會

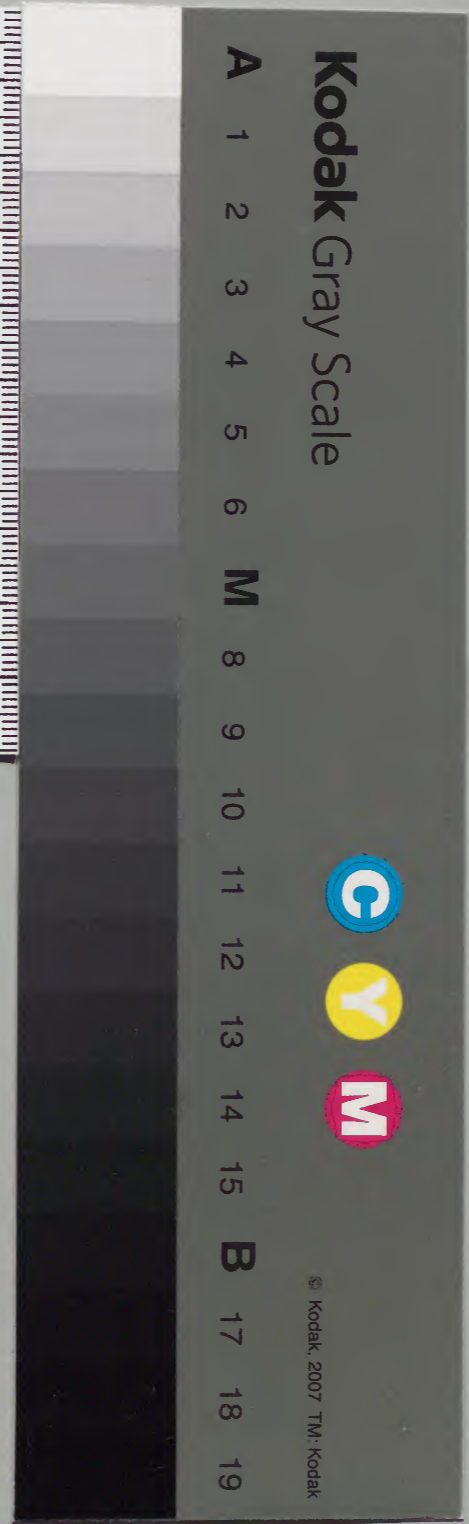
二十

農務省 商印 圖書 第 共 號 冊

太政官文庫 和書門 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

内閣文庫 和書類 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

内閣文庫	
番號	和 11387
冊數	19 (19)
函號	174 31



消印

新宿 河口
 松戸街道
 川
 魚有と
 所を流す
 中川
 鯉魚と
 産
 美味



新宿 河口
 松戸街道
 川
 魚有と
 所を流す
 中川
 鯉魚と
 産
 美味

消印



三十八冊五十四頁

夕顔観音堂 新宿の渡口より半道より西北の方中川の堤

傍に飯塚村とありあり本寺聖観世音ハ金像あり

深丈五寸計ありと云されども深く内合籠に秘して拜せり

をゆきすり列々慈覚大師の刻の観音の木像を以て合籠前

安宅相傳ふ此地ハ昔莊官関口氏某の采地あり

墳墓の旧址なりと 往古関口氏此地に就く熊野権現及び水神

等の社を創せ 此叢祠其社前より老松と榎樹の二樹の雙立せる

あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増せ人以此奇ありと云

又此樹間時と云光を發し或ハ龍燈の梢にかゝると云

寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀りて此

樹下を堀し一二の佛具を得たり

祠の傍に住む翁温素より信心や日蓮の是必古時此地に有名の寺院

ありと云んと云く竟も同年六月六日謹く猶此土中を堀しに

金像の大非の像一軀を獲り

深谷氏の家に移し假し佛壇に安宅相好端嚴実は凡工の

所造よりあり然るに前宵深谷氏老翁媪共夢の

應ありと云く奇ありと云く竟も此地を闢く草堂を

營し此靈像を遷し

按し世に夕顔観音の像ハ執風の中より出現し其像ありとも云或云

猿俣 新宿より北の方の邑名なり

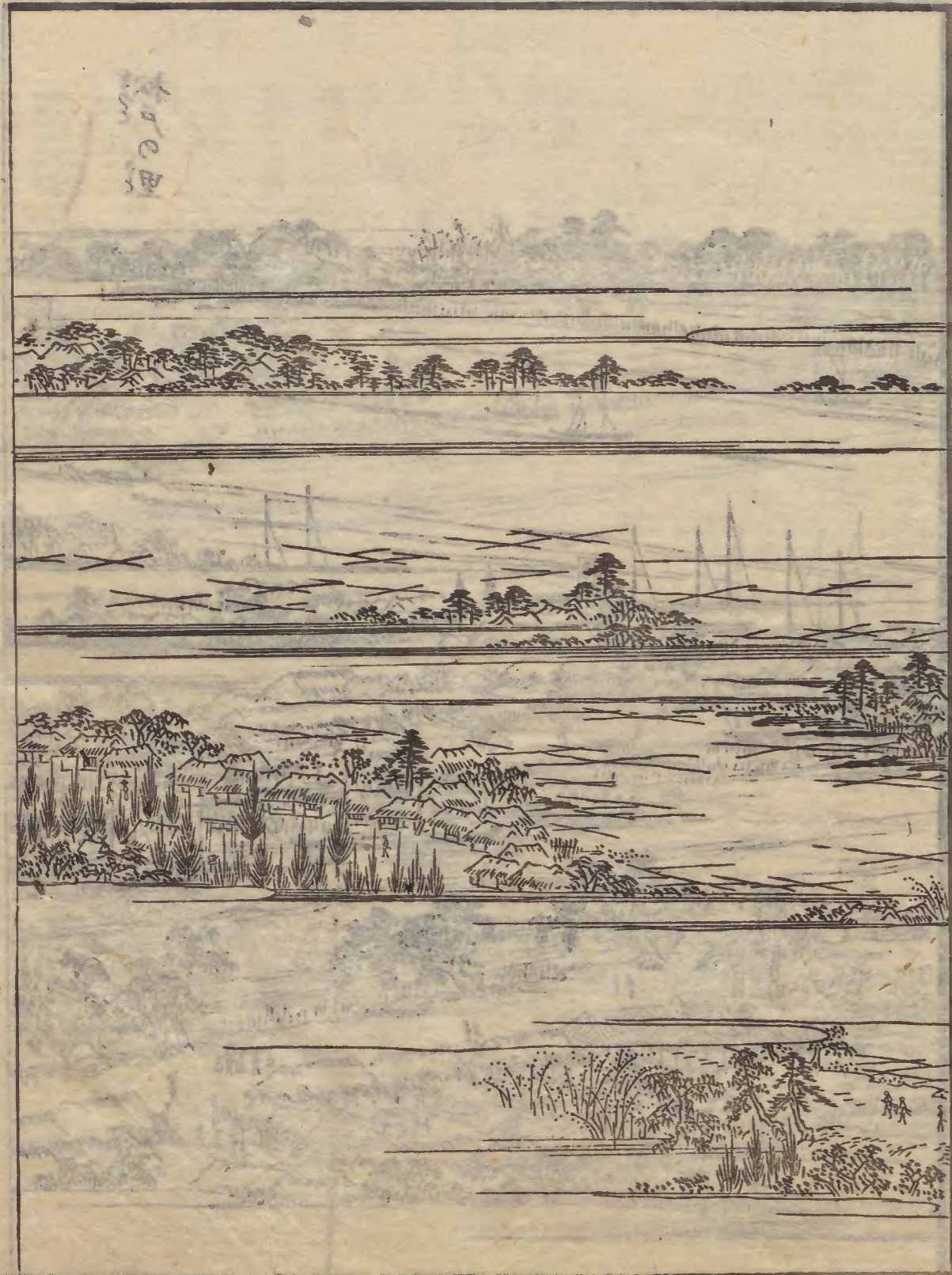
神鳳抄曰 下總國 葛西

猿俣 御厨 百八十丁 新御厨 在之 云云

和銅寺廢址同所あり 佛生山と号し 真言の古藍や

和銅年間 草創ありと云傳ふ中古迄も伽藍巍々たり

天文六年 國府臺合戦の時 兵火の爲ふ 灰燼と成り

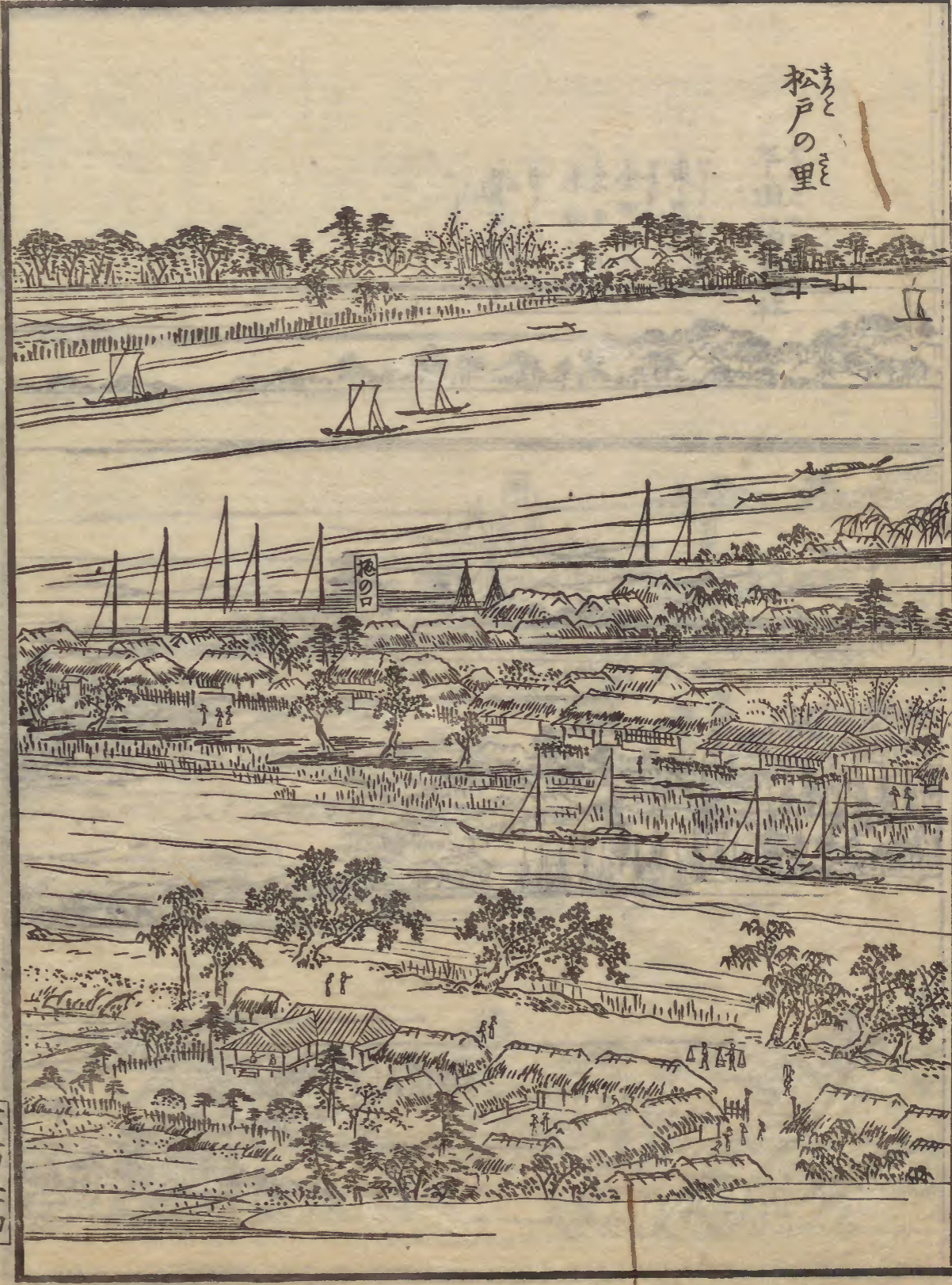
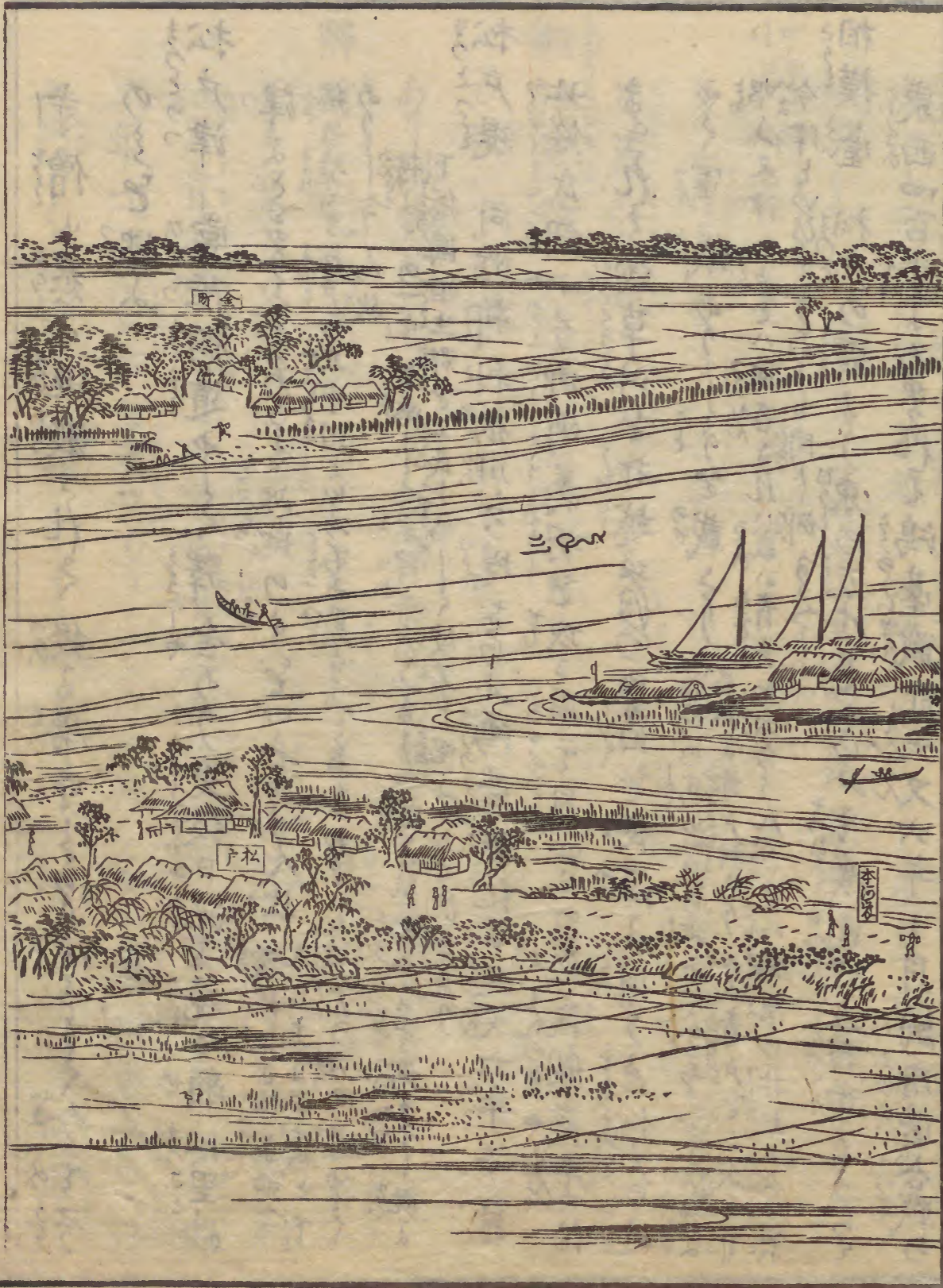


半田



半田稲荷社
東葛西領
金町あり
来由ハ洋
遺小記す

半田



七百三十四

寺僧も悉く退散され終に廢寺となり今其号の^{いまでも}を傳ふ

松戸津 常陸街道中^{まるとのつ}に驛舎あり更級日記に鏡の瀬松里に

津とありく^つとあり^{まるとのつ}此地の^つをい^{まるとのつ}わらん^つ欽^つ 美経紀に治承四年九月十日武蔵と下総の境あり松戸の庄市河とりの^つの^つの^つあり^つむ^つを^つ松戸の^つの^つ谷^つあり^つあり^つあり^つん^つ欽^つ

松戸堤 同所新利根川の堤をい^{まるとのつ}鴻基戦記に天文六年十月

北條氏綱小弓河所義明を攻^つり頃^つ月四日の夜氏綱夜半に

あ^つき^つれ^つ浅草川を打越^つゆ^つの宿を夜深^つを通り^つ松戸の堤

相模臺 松戸の驛より東の方北臺をい^{まるとのつ}廣南北五百歩あり^つ東西四百歩あり^つ鴻基戦記天文六年十月國府臺合戦の

条下^つ松戸の川を打越^つゆ^つ陣の内より^つ推津村上堀江鹿島と

始^つと^つ五十騎^つと^つ相模臺^つ打揚^つ敵の人数^つと見合^つとあり

小弓河曹子墓 鴻基戦記義明滅亡の条下^つ乳母^つレンセイと^つい

行徳船場 行徳四丁目の河岸なり土人新河岸と唱^つ入^つ旅舎あり

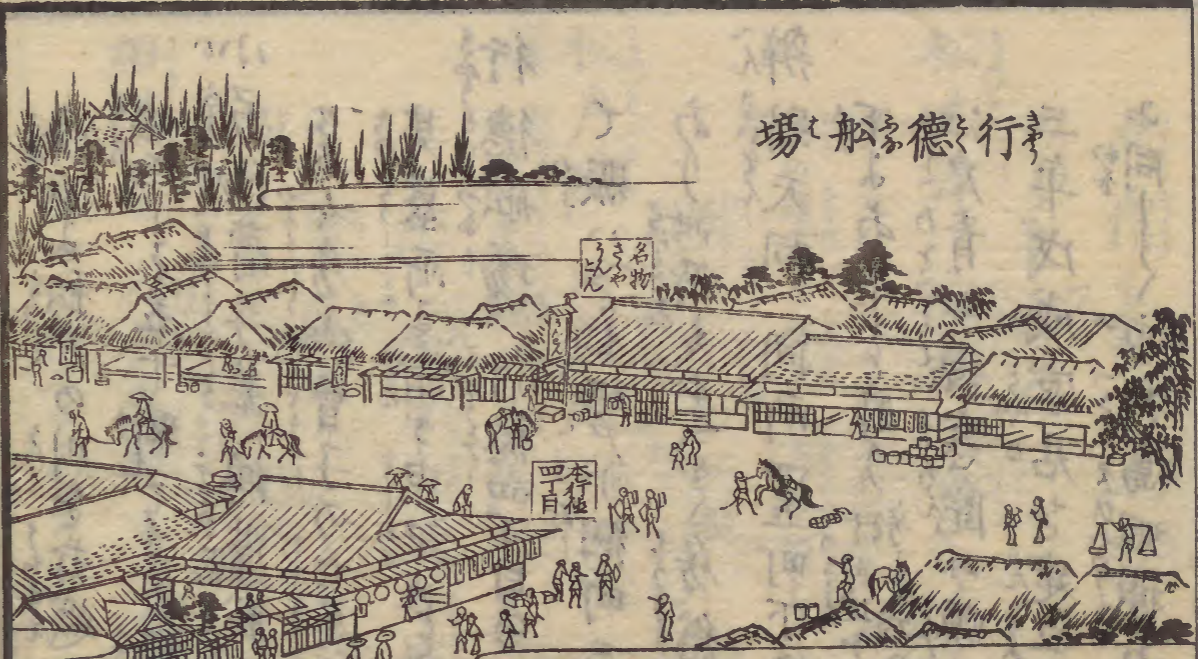
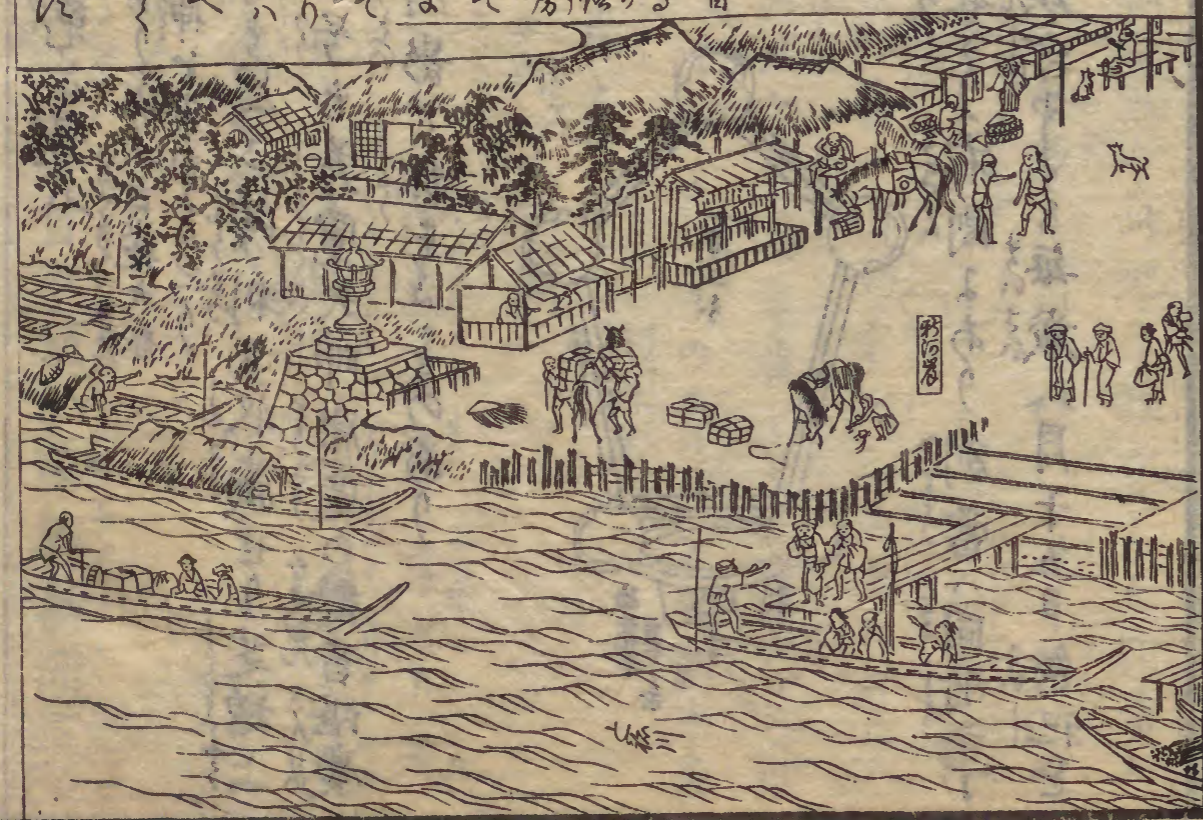
て賑^つハ^つ江^つ戸^つ小^つ細^つ町^つ三^つ丁^つ目^つの^つ河^つ岸^つより^つ此^つ地^つ迄^つ船^つ路^つ三^つ里^つ八^つ町

辨財天祠 同所四五町下の方湊村^つあり昔^つハ^つ潮^つ除^つ堤^つの^つ松^つ林^つの

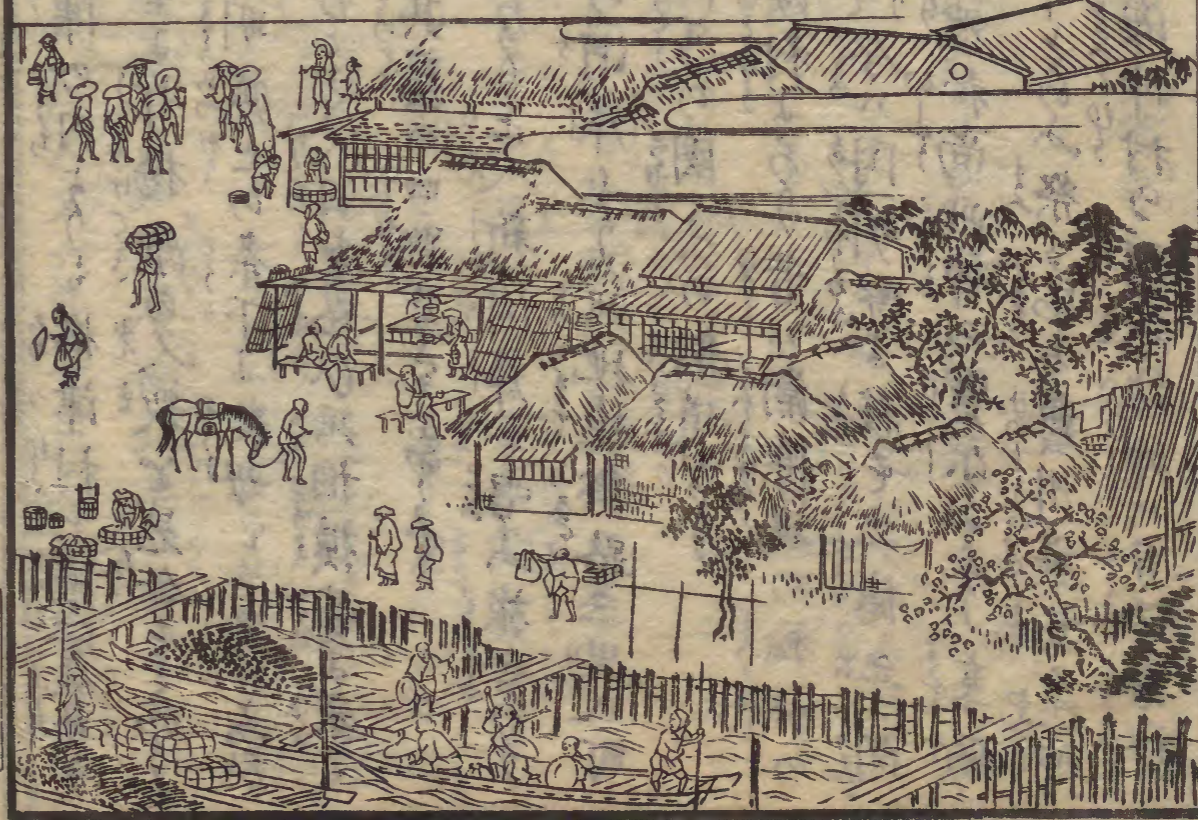
江戸青山梅窓院の順誉唯然和尚此神の靈^つ尔^つより^つ享^つ保^つ三年戊戌宮居を建立あり^つとの^つ祭^つる^つを^つ藝^つ州^つ嚴^つ島^つの^つ法^つ神^つ小^つ同^つ市^つ杵^つ島^つ姫^つ神^つ中^つに^つ海^つ神^つ村^つの^つ阿^つ諏^つ訪^つ神^つハ^つ男^つ神^つ尚^つ社^つハ



大江戸小細町三目
 乃徳の巻とる
 三里八丁あり房
 徳の路踏おて
 旅亭ありなま
 行人絡繹とて
 勢昌の地なり
 徳更正六九月ハ
 成田不動寺ハ
 素詣の人影ハ
 賑ひ大方
 ナリ



行徳家船場



女神と称す神田あり弁天免と唱ふ

船靈宮 画像一幅探信の事あり古此地大船

古鈴一口湊村青場山善照寺と号す浄刹は收藏せり芝増上

寺は属を開山ハ覚譽上人と号す慈覚大師彫造の観音湛慶の作の焰王又法然上人鑑師影と称するものあり

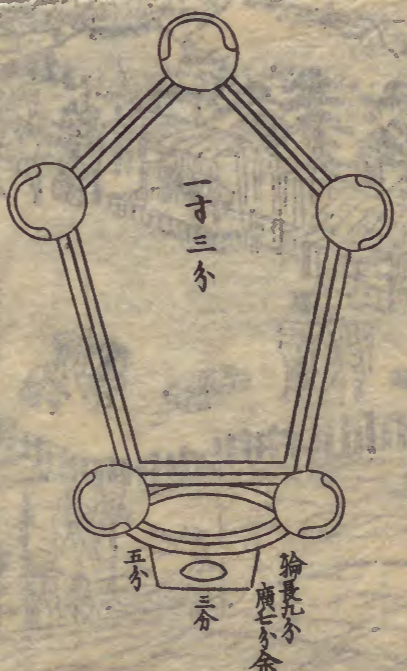
斤量五十二錢目餘

唐銅のゆく甚古色あり

惣長サ三寸二分劍の裏延板

鈴大サ三寸四リ内小石一宛

あり鈴の口一寸八分劍先より元まで二寸三分



行徳八幡宮 本行徳三丁目道より右側より別當八同所一丁

目自性院兼帯此地の鎮守や毎歳八月十五日祭祀を行ふ

神明宮 同所一丁目街道の左側よりあり此地の鎮守と号す別當ハ

真言宗や自性院と号す毎歳九月十六日を以て祭祀の

辰とす其祭の儀を伊勢内宮の土砂を迂して内外両皇大神

宮を勧請し相傳ふ當社昔ハ川向中洲と云地よりあり

後此所へ遷すあり又此地を金海の森と号す慶長十九年

甲寅金海法印と号す沙門此地より一字の寺院を開創して

金剛院と号し依る金海の森と号す金剛院今ハ

按て葛西志と号す書ハ行徳ハ金剛院の開山某

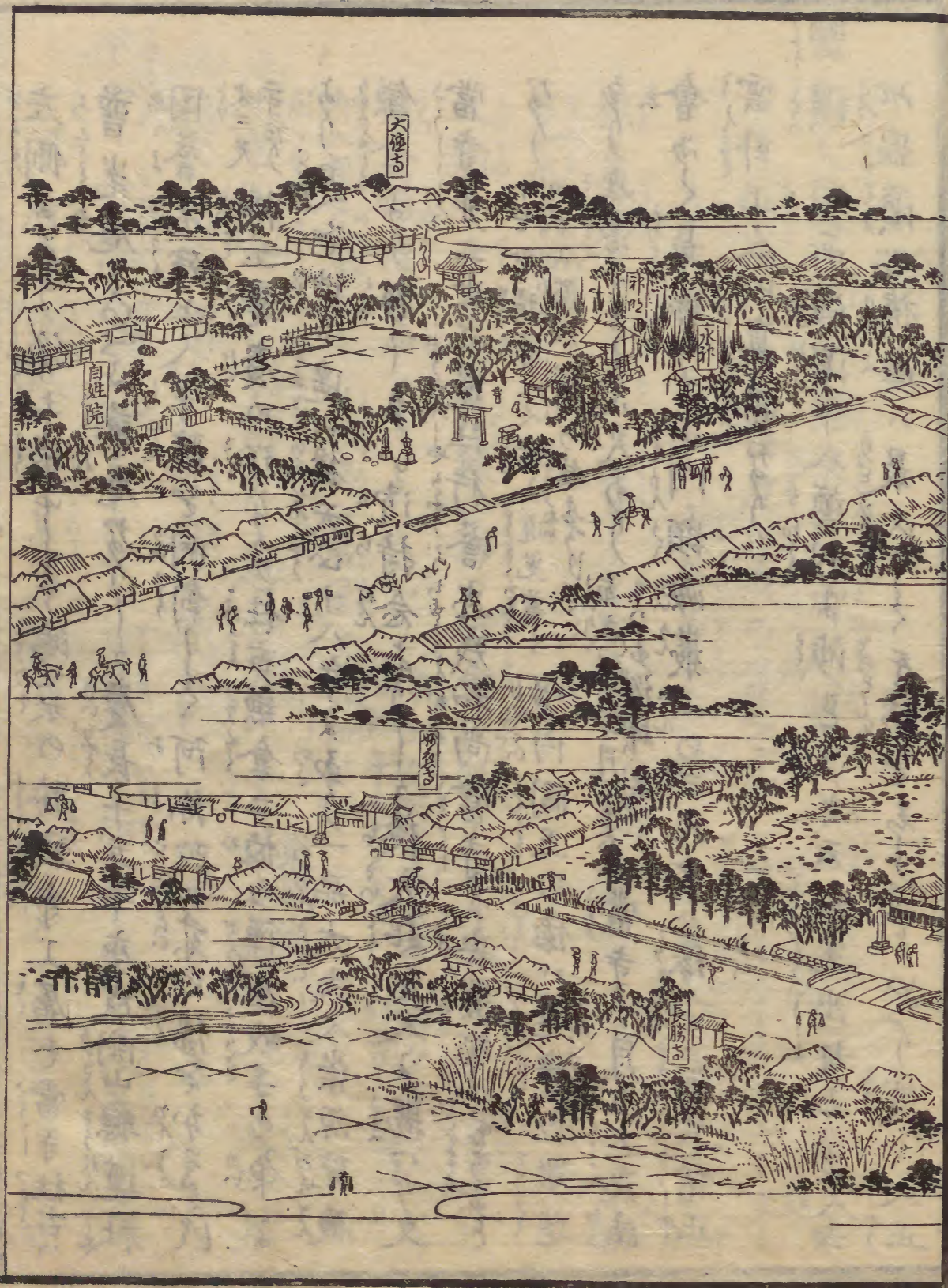
金剛院廢址 當寺より南の方より所移屋敷と字せり是

則先より此地の金剛院の旧地なり金剛院ハ羽州羽黒山法

漸寺は属をとり其昔仍徳有驗の山伏住りてに

竟は此地名とあり云傳ふ

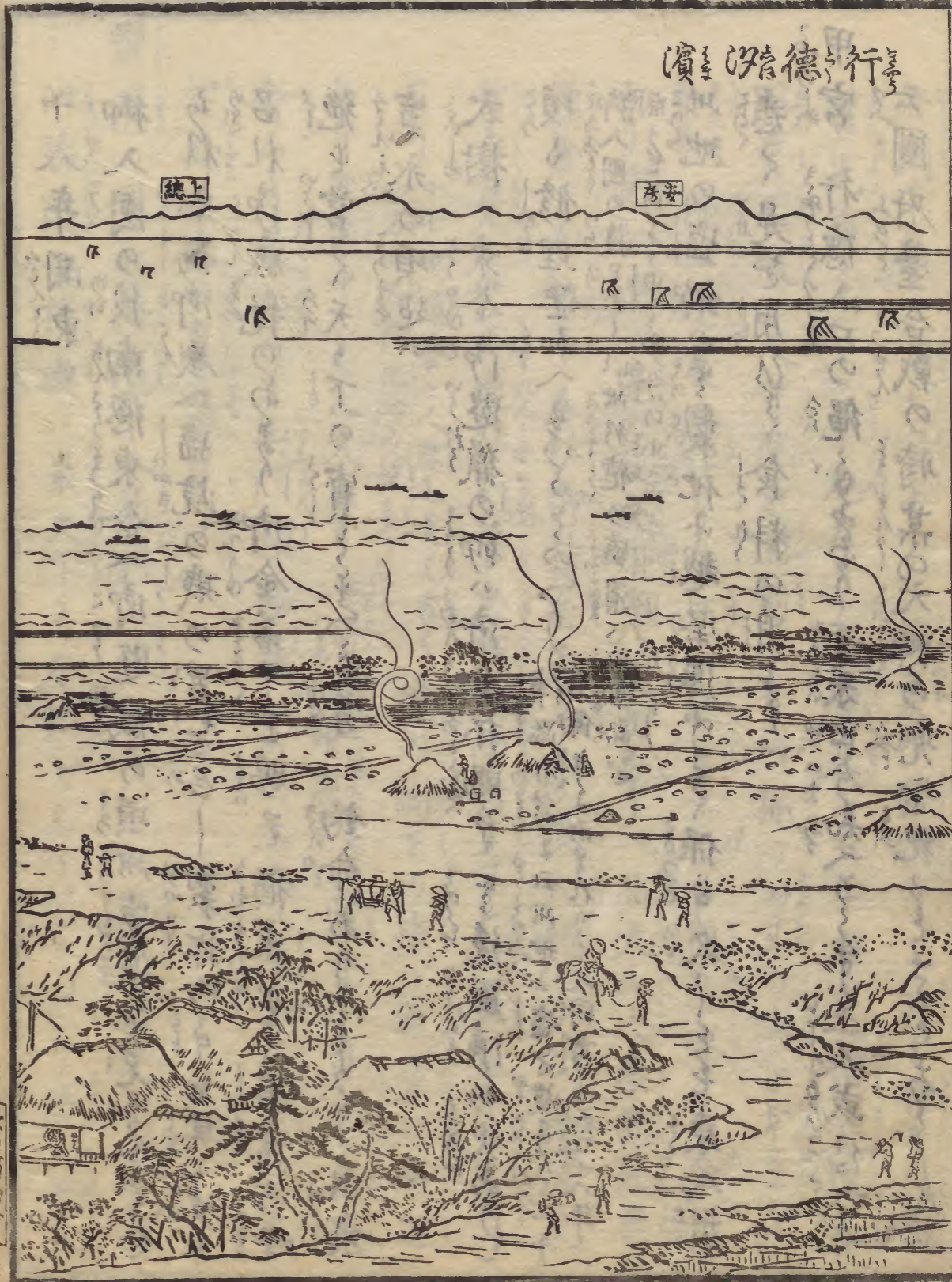
海巖山徳願寺 本行徳の驛中一丁目の横小路船橋間道の

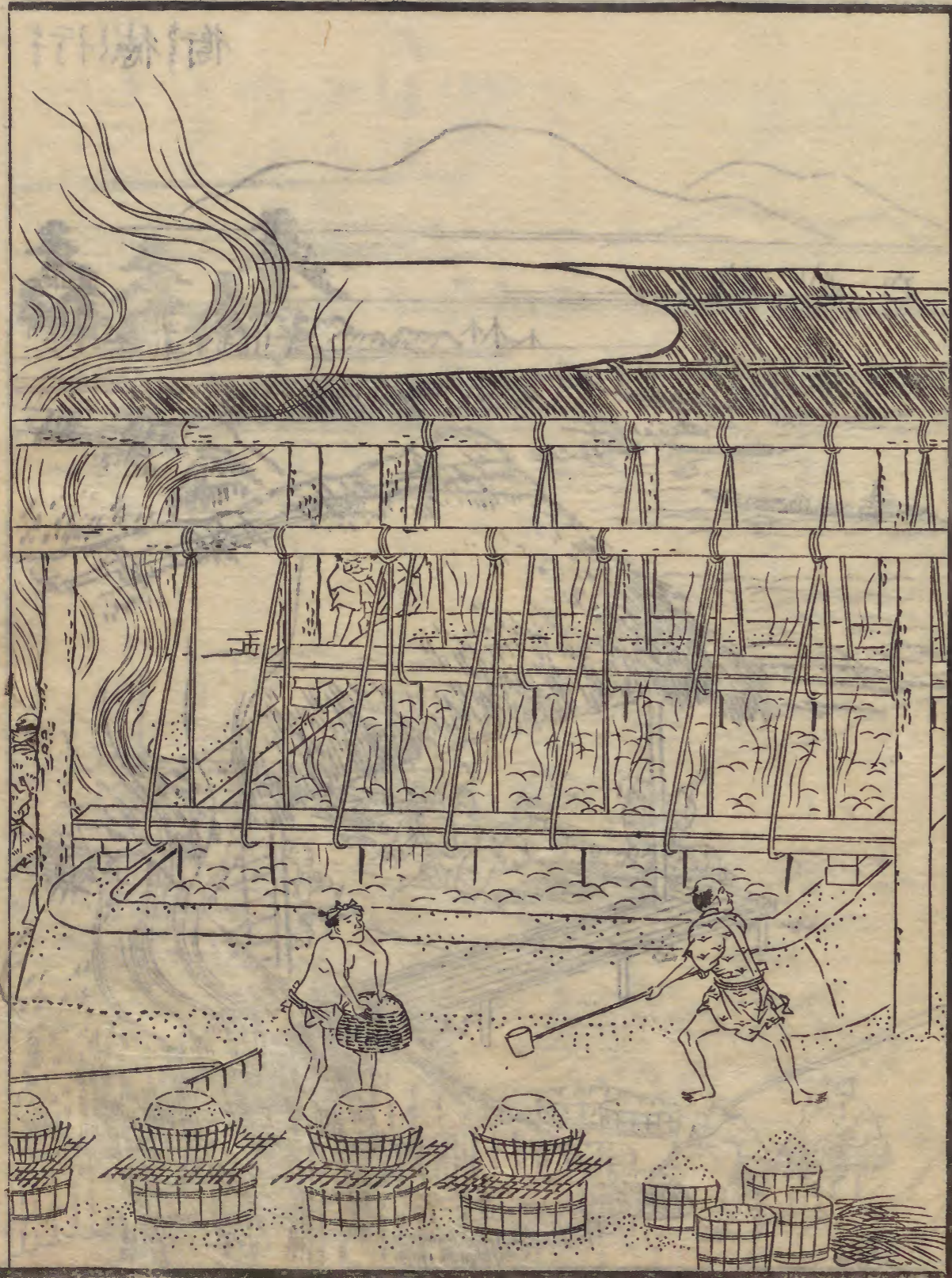


左側より浄土宗中へ鴻巣の勝願寺は属せ當寺往古
普光庵とて草庵なり慶長十五年庚戌閑山聰蓮社
回譽不残上人寺院を開創し阿弥陀如来の像をかき
文三尺佛工運慶の作なり往古鎌倉二位の禅尼政子の命よ
あり是を造る遙の後天正十八年より一品大夫人崇源院殿
鎌倉より移し多し持念あり後大超上人に賜り又
當寺弟二世正蓮社行譽忠彦和尚當寺に安置なり
なり十七世晴譽上人殊道光普く境内閻王の像は運慶の彫造
あり座像ゆへ八尺あり毎月七月の十六日當寺十月八日夜法
會あり最賑り山門額海巖山の三大字は縁山前大僧正
雲卧上人の真蹟なり
鹽濱 同所海濱十八箇村は涉りりと云風光出趣あり去
此鹽濱の権輿ハ最久しく其始を考へたり然し天正

十八年 關東

御入國の後南總東金へ御遊獵の頃此鹽濱と云ふかたをせ
られ船橋御殿へ塩焼の賤の男を召し製作の事を具し
召れ御感悦のあまり御金若干と賜ふ猶未永く鹽竈の煙
絶む宮々天り下の寶とせし旨 釣命ありしり 以来
寛永の頃迄ハ
大樹 東金御遊獵の御ハ御金杯賜ふ其後風浪の災ありし
頃も修理を加へり
御入國の後日あり此の徳の鹽濱への船路と
此地の鹽鍋ハ其製他ハ越堅強ゆへ保み久しと東八州
悉く是を用ひし食料の用とせ
甲宮 行徳入口の繩ゆあり其由来由今知へり土人或傳へり
云國府臺合戦の時某の大將の堯を紀すと云とありん然





當社ハ行徳八幡宮の
別當兼帶御記す

日光大師鏡御影

行徳の東の海濱高谷村浄土宗了極寺

安を日光大師鏡を照しく自己の姿をうつし畫をまゝ

所影なりとしり土俗錦の海當寺は僧正祐天和尚真承の

塔婆あり寄持あり昔此地は長島殿と稱せし領主ありし地に住せし

長島湊 葛西長島と一雙の地あり

梵音寺の廢址あり相傳ふ太田道灌の頃ハ國府臺の湊は船を

泊す其後野州奥州常州德州等の國々高瀬舟の便利よき

を用ゆるありしより行徳へ運送せらるるありし

永祿二年小田原北条家の分限帳は太田新六郎所領の中は葛西長島高

新利根川萬葉集に補小作り活字板曰名を太井河といふ東鑑等の書に云

郡又清輔興義抄云下総國かのの郡の中は大河ありゆ井といふ河の東は葛西の
今武蔵國に屬せし又北条五代記國府臺合戦の条下はかの河といふ河といふ
世俗坂東太郎と稱し或ハ文卷川又か河といふ河とも唱へし

行徳を流るる小行徳川とも号く水源ハ上野國利根郡文殊

嶽の山谷より發し高科川吾妻川鳥川碓井川及び信州の

國郡より出る所の諸流合し武州幡羅郡に至り一河となる

又上州渡瀬川も利根に落合栗橋より分流し一流ハ北総小

入開宿本丸等の地も傍る東流し鉾子より海に歸せ是を

利根川と号く坂東太郎一流ハ武蔵下總の間を南へ流れ國府

臺の下を流徳の方へ曲流し海水に歸せり是を新利根

按し侍中群要に散位と刀稱とあり西宮抄に大節ハ大夫を刀稱と稱す

と云ふ公事根源云大節は刀稱とあり又朝野群載に檢非違使廳下

刀稱とあり五位以上の中はこれに名目なり又朝野群載に檢非違使廳下

稱職にありしを長上の官と稱す又朝野群載に檢非違使廳下

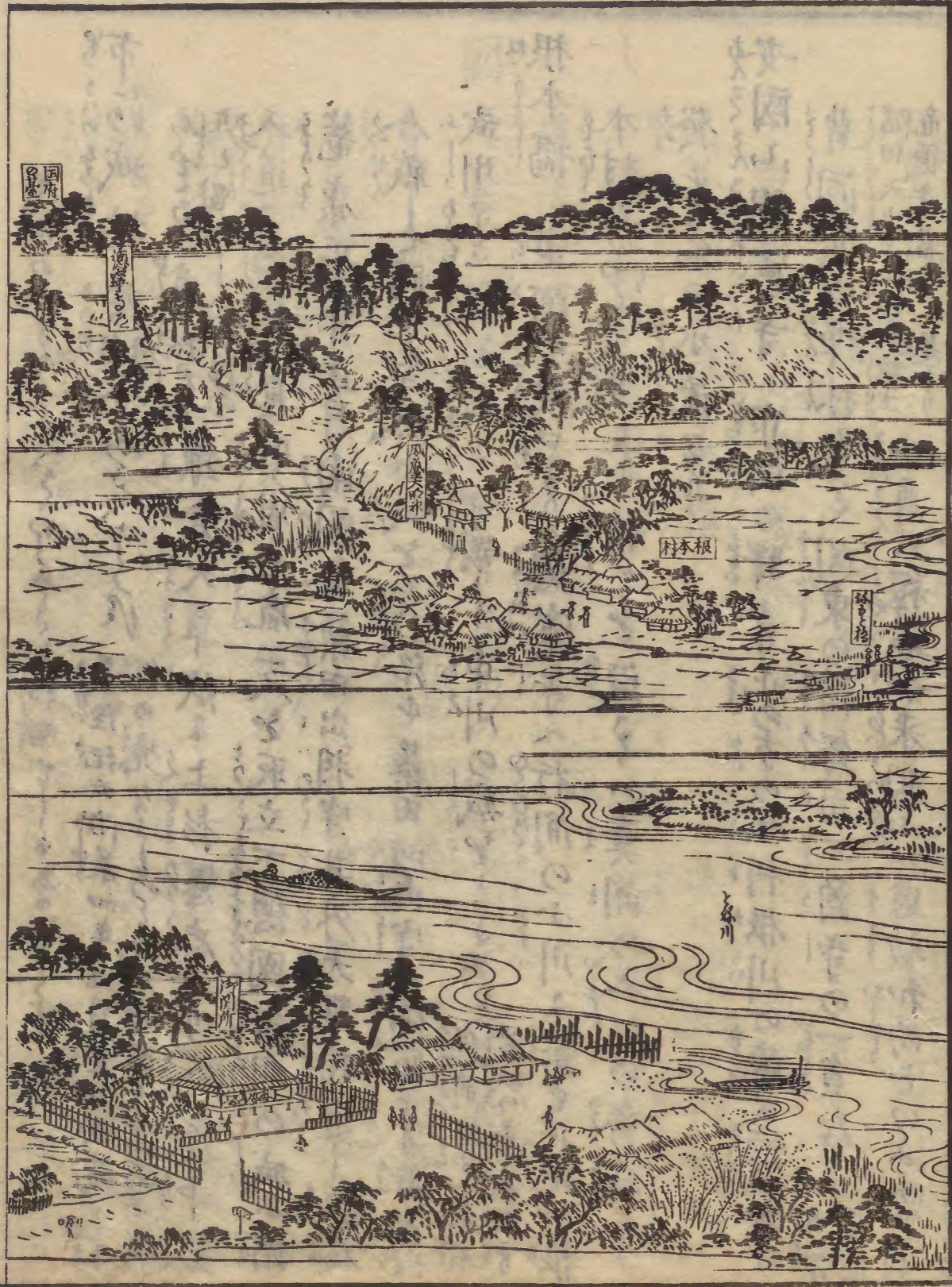
延喜祝詞式に倭國の六津縣能刀稱男也至下畧のありし百姓あり

里長防合などとも刀稱といふは古今著聞集にもありしと云ふ

神小毎歳正月初午日大頭といふを勤む御刀稱と稱し旧家三十六人の

ありし是を位とむ各六位中明神の供奉職なり又五節の式

ありし是を位とむ各六位中明神の供奉職なり又五節の式



里依あゆりつゝとてかめと結唱せしもあるけり

市河城址 其地今あきり

義経記云治承四年九月十日武藏と下
後の境なるまのの庄市河と云ふ着

鎌倉大草紙に上杉憲忠より今度中務
入道了心の子息實胤自胤二人を取立下徳國市川の城小楯

菴康正二年正月南圖書篠田出羽守其外大勢指遣一教度
合戦とて同十九日終小城を責落を篠田河内守八閑宿より打と出

根本橋 市河の渡口より 總寧寺へ行間の小川に架せ此地を根

本村といのり号とを橋下を流るゝ真間の入江の舊跡より
發せし水の水流なり

安國山總寧寺 市河の驛より北の方の立利根川の流に傍てあり

曹洞派の禪林なり 関東の僧録司三箇寺の一負たり
富田大寺武藏越生 常陸
竜徳寺當寺は是なり

往古ハ近江國あり天正三年乙亥北條氏政當國閑宿北

地小移せされと屢洪水の患あふあり寛文中竟は此地小引

とあり惣門の内右小鹽竈六社明神の社あり陸奥の摸なり

と大田道灌手植櫓と稱せり大門の通り列樹の中下馬の

石碑小相對して右の傍にあり又客殿の脇小梅の老樹あり是の

道灌親裁る所と 當寺より涼師道正
庵の解毒丸を出せり

國府臺 總寧寺の辺より真間の辺迄の岡をまゝかく稱せり
あぐり 北条五代記云古き文の國府臺小符代嶋谷とも 按よ鴻臺ハ武

州栗橋の西ふあり此地を云ふは和名類聚抄に下総乃國
府ハ葛飾郡ふありと記せり依考あふ國府の近き辺ふあり

立山あれハ國府臺と号たりあぐり
或人云下総國葛飾の府ハ
往古專葛西の地を本府と

世にありく葛西昔ハ下総小属せり永正六年の宗長ハ
行東土産中下総國葛西
の府のうも半日ありと記す

葛飾郡ハ大郡ありハ利根川と國府を中央小定めく以東を葛東と呼び以西を



國府臺
總寧寺

其二
古戰場



葛西とハ嘯つてありてそれと今ハ利根川を際りて葛西の辺こらく武蔵國へ
加へたまふありとハなりあり
國こ府ふ基き古こ戰せん場ばう 總そう寧ねい寺じの境けい内ないまゝ其その舊きう跡せきなり文明ぶんめい十じゅう一いち年ねん

七月しちがつ北きた總そうの一いつ揆げい白はく井せいの城じやう小せう楮ぢゆ籠ろうりる項かう太たい田てん持ぢ資し兵へいをを發はつして
此この地ち小せう陣じん城じやうを取と立た件けんの一いつ揆げいを攻せう落らくして程ほどの究きゆう竟けい乃なり要えい害がい
なりこれハ天文てんぶん六ろく年ねん也なり或あるハ小せう弓きゆう御ご所じよ足あ利り左さ兵へい衛ゑい佐さ義ぎ明めい
兵へいを起おこして小せう田てん原げんを攻せんとし御ご事じなると小せう田てん原げん洩あて其その聞きこあり

これハ同年十月四日北条氏綱及ハ氏康小田原を進發一同五日
鴻こうの臺たいの陣じんを責せる戦いくさハ利りあり義ぎ明めい父ちち子こ并なら舎しや弟てい基き賴らい共とも討うち
死しも又また永えい祿りく七しち年ねんハ大おほ田た新しん六ろく郎らう 齋さい兄あに弟ていの輩たぐひ小せう田てん原げん小せう苗めう苗めう
美み濃のう守しゆ資し正せい入にゅう道だう三さん樂らく弁べん及及び以もつ里り見み安あん房ぼう守しゆ義ぎ弘こう等らうと此この地ち小せう也なり
これハ小せう田てん原げんより討うち手てとして遠とほ山やま丹に波は守しゆ同どう隼しゆん人にん佐さをむかへ
故ゆゑハ太たい田た兄あに弟てい相あひ國くに相あひ違たがして武ぶ州しゅう岩いわ附つへ落おち行ゆり然しかハ北きた条じょう
氏し康かう父ちち子こ小せう田てん原げんより馳を向むかひ同どう年ねん正せい月げつ七しち日にち八はち日にち大おほ小せう戰せんハ依より



總寧寺
羅漢井

總寧寺晚眺
 荒城千仞沒 蕭寺上方開
 山斷江帆出 跡廻郊樹來
 磬鐘餘鹿野 戰代古鴻臺
 落日斯時恨 臨風起客哀

南郭



國府臺
 断岸之圖





義弘三樂の輩終小敗走也

以上諸書に載る
事の要を摘む

殿守臺旧址 同一境内にあり上小富士浅間の小祠あり

白檀多し

石櫃二座

同所あり寺僧傳云古墳二座の中北ふらふらとを里見越前守忠弘の墓ありとの一ツハ其主詳か

或云里見義弘の舎兼正木内膳の石櫃なりと中古土崩れりといふハ石櫃の形地上にあり其項櫃中より甲冑太刀の類ありハ金銀の鈴陣太鼓其餘土偶人等を得りて

發其二を存して徳寧寺に収蔵せり

鐘同所淵同所断岸の水利根川の水を号く傳云里見氏乃陣

鐘此淵小沈没せ故小号とすと此鐘此地の水底に存せり或人云鐘の水中に落入りゆゑなりと此鐘ハ船橋慈雲寺の鐘ありと此地へ持來りて

國府城址 同所徳寧寺より東の方を以て往古國府五郎某の人の居城なり

按小國府五郎八千葉介常胤の弟國府五郎胤道と云ふべし其後裔の居此地に住し慶長の頃遷居せられり今ハ同卷牛湊前宮の条下ゆを國府五郎のゆを奉置りて

國分山金光光明寺 同所東の方國分寺村あり今ハ新義の真言宗

中々京師三寶院不属を本尊藥師如来の像ハ岡山行基大士の作脇士の十二神將ハ運慶の彫像なり

堂内鬘頭盧尊者ハ當寺に

聖武天皇の御願ゆゑ毎國不置り所の國分寺の一なり中興

山と宥天法印と号し本堂の額ハ金光光明寺の四字を畫せハ智

積院僧正運淑の筆なり

樓門樓上小古佛釈尊と安置を閑創釋迦堂本堂の右にあり

天王の像ハ上古の物やゝ甚奇古なり其餘古佛像多し續日本紀ハ云聖武天皇普く天下を釋迦牟尼佛の金像高一丈六尺者各一鋪を造り并大般若經各一部寫しむ云

小田原北條家制札一通興小子二月十四日遠山左衛門守とあり

古證文二通二通とも天正十三年己酉二月三日とあり

とあり其文中ハ十二坊のあり近き頃も其十二坊存せりとも今ハとく廢せり

古笈一権大僧都觀學院慶長六年と彫あり

延喜式主稅式目下總國公廨各四十万束國分寺

料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

藥分料一万束下畧

鏡石

真間の弘法寺より
國分寺へ移方の
田畔石橋の傍小
溝の中あり入云
此石根地中入す
其際をあらす
依要石とも号く
るとあり



當寺往古ハ加藍魏々あり一々ともあまの星霜を經く大小衰
廢一今ハ昔の万一を存するのモ當時の礎石と稱するもの堂前ハ
あり今の寺境ハ大田道灌の頃の陣屋の旧跡ゆく古の寺境ハ乾の
方ありり今ハ畑とあり

内膳山 國分寺より東の方一丁計を隔てる丘を以て往古里見

義弘の舎弟正木内膳の陣營の地なり

鏡石 弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中にあり

此石根地中に入り其際をあらす故に一ハ要石とも号くとあり
土人此石橋ハ國府臺にあり石棺の蓋なる由云傳ふ

持國坂 國分寺より真間へ行方の坂を以て古ハ此地ハ國分寺の

四天王の内持國天の堂舎あり一故に号とすとあり

真間山弘法寺 國分寺の南にあり市河村日蓮大士弘法の地ハ

一ハ六門家と稱する所の其一員なり日頂上人を以て開祖とすと

真間弘法寺

我身ハ
の
まの
松
日蓮



入重
玄門
倒修
丸事
の意
を
こ
ろ
人
を
と
せ
し
程
不





本國院日頂寺師ハ六老僧の中にて伊豫阿彌梨と稱す富本常忍の子なり文永四年
 丁卯時運上人小就く得度也弘治五年壬午上足の第五とある日蓮上人の滅後守塔居
 と營成りて本國院と号し其入山本坊と稱す正安元年己亥父常忍寂その後哀とつ
 く〜八月十一日とせ去り終ふ〜依示寂の年月其終焉の地を〜
 本堂中を釋尊の像と安を富本常忍嘗
 造り當寺小奉安也日蓮上人時頂師を祖師堂ハ其右小並み内小宗祖上人の
 像と置此像ハ日法上人の作なり支院十餘宇各磴道此下に
 列と大門ハ松の列樹中〜六丁程あり

楓樹 釈迦堂の前あり今ハ枯株と存するのむ〜ハワ〜四五丈ハ
 遍覽亭 方丈の構のありあり額ハ遍覽亭と題す黃檗千保和尚の筆跡
 樓門 石燈の上ハ簞笥左右の金剛力士ハ工運慶の作なりとあり全髹黒色ハ
 當寺往古ハ真言瑜伽の古刹なり〜日蓮大士此地ハ遊化の頃
 寺僧大ハ宗意を論〜竟ハ大士の化導ハ歸依〜宗風を改
 轉せるとあり
 或人云西新井邑総持寺ハ安と宗の弘法大師の靈像ハ
 當寺改宗の頃か〜遷〜まわ〜せ〜と云日統抄曰了性

真間の弘法寺に住せ或日常と河谷を屈を請う逃り日常衆徒を化す新因之本世の道場と云又先徳記を考ふ東河田谷天台宗の中不詳性と云あり本文小宗祖上人と問答せ住侶の名を住せを考ふくを此下性考ふあり

當寺 什宝多き中を宗祖上人及ひ諸徒の真筆の曼荼羅消息の類ひ数通あり悉く奉ふ不違毎歳九月九日より十八日迄法華經千部讀誦十月十三日ハ宗祖上人の忌日たより御影供と修行せり近在の道俗群衆を

真間浦 同弘法寺の前の水田の地を以勝鹿の浦といふ也此所のゆを云ふなり土人云昔ハ真間の崖下も浪打寄たりと此のあり所謂大洲ハ初く洲不あり所謂立野ハ芦を刈り陸地とあり一あり芦洲といふを萱野中を水田を開墾せしなり

万葉集 可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈妣等佐和久奈美多都良思母

夫木抄 此の浦のゆを考ふなり

續後撰集 此の浦のゆを考ふなり

俊頼

續後撰集 此の浦のゆを考ふなり

真間濱 地を以勝鹿の浦といふ也

夫木抄 此の浦のゆを考ふなり

真間入江 是も同一辺なり是れも今ハ耕田とあり又ハ民家林藪ふ沿革して古は違へり

万葉集 勝牡鹿乃真々乃入江爾打靡玉藻刈兼手兒名志所念

續十載 夫木抄 此の浦のゆを考ふなり

真間於須比 義なり又詳沖阿彌梨の疏葉代而記ふまかきしハ駿河能宇美ありしハ浪えめくまきしとハ意ありとあり磯辺といふあり

仙覺律師の萬葉集抄云於須比ハ山といふなり

磯辺といふあり

万葉集

可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻未
乃於須比爾奈美毛登杼呂爾

真間継橋 弘法寺の大門石階の下南の方の小川架を所乃

あつ川の橋の中あつ小橋をこりてり
或人ノ古ハ兩岸より板を
中梁より打ちける故に継橋といふ

万葉集

安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻
未乃都藝波志夜麻受可欲波牟

新勅撰

猶麻也昔のまに延移をいせしすくまうひるうが 長司

風雅集

有る不越り波はわ川にやう川をくま間の延移 雅経

同

かゝれまの海風吹あたり夕波越るよとれつきまに 朝村

按小朝村の和奇ふよとのつきまといあまの水の濺ふうけりといふ意あり
山城の邊といふあり

入重玄門倒修凡事の意を

らふ人を波とせし御ふあまをよとのまに延移 日蓮

真間手見名舊蹟 同所継橋より東の方百歩をうらふあり手見

名々墓の跡なりとる後世祠を営てこれを奉一手見名明神

と号し婦人安産を待り小兒痘瘡を患ふ類ひ立願して其

奇特を得とり祭日ハ九月九日あり

神弘法元年中辛酉九月九日此
靈告ありあつて崇めばとて春墓文集継橋記ハ手見名のうを載りといふ
其説里諺あつてのうらまに證とせしふ足らず

清輔與儀抄云 是ハ昔下総國勝鹿真川里の井ハ水汲下女

なりあまゆき麻衣を着ててとく水汲其容貌妙なり

貴女ハ千倍せり望月のゆく花の咲うゆくゆく立るを見人々

相競ふり夏の虫の火入う如く湊入の船のゆくなりこふ女思ひ

あつ川に一生のそくあつを存し其身を湊よ投中畧

又か川に此ゆのてかともよあり真間乃入江真間此

継橋真間の浦真間井真間の野なとよあるこれ此あり

云々

過勝鹿真間娘子墓時作歌
山部宿禰赤人
古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻
問為家武勝牡鹿乃真間之手兒名之奧擲乎此
間登波聞杼真木葉哉茂有良武松之根也遠久
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間間能手兒名
之奧津城處

詠勝鹿真間娘子歌

高橋連蟲麻呂

鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絕
言來勝牡鹿乃真間乃手兒奈我麻衣爾青衫着
直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎谷
不看雖行錦綾之中丹暴有齋兒毛妹爾將及哉

望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入
火之如水門入爾船已具如歸香具禮人乃言時
幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音
乃驟湊之奧津城爾妹之卧勢流遠代爾有家類
事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

下總國相聞往來歌

作者未詳

可都思可能麻未能手兒奈乎麻許登可聞和禮
爾余須等布麻未乃氏胡奈乎

真間井

同所北の山際鈴木院との草庵の傍ふあり手兒奈
汲る井ありと云傳人中古此井より靈龜出現せ故に亀井

梨園
真間より八幡へ
仍道の間
あり二月乃
花盛ハ雪と
欺ハ似たり
李太白の詩
小梨花白雪
香と賦し
も羨なり



ともいふなり
此の鈴木院と云ハ北茶家の臣中
此の造立故小鈴木と号ハ又此庵の傍ハ其祖先鈴木近江守
石塔ありこれ同修理と云入造立せり
按小寛文八年戊申相州鎌倉鶴岡修造の時の工面と鈴木修理長常と云
然時ハ番匠の家なる人秋賀岡梁牌ハかく載れども又別の人もや按考ハ
万葉集
勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

葛飾八幡宮 真間より一里あり東の方八幡村あり
常陸并房総の海道中

驛なり身居ハ 別當ハ天台宗中ハ八幡山法漸寺と号ハ本地堂
道中あり

あ々阿弥陀如来を安置一ニ王門ハ表の左右ハ金剛密迹乃
像裏ハ多聞大黒の二天を置り神前右の脇ハ银杏の大樹

あり神木トす
此樹のうづらの中ハ常小蛇栖あり毎年八月十五日祭礼の時音楽
を奏シ其時数万の小蛇杖上ハ頭れ出つ衆人ハ之を奇なりと云

古鐘一口 寛政年間枯木の樹を穿て是を以て其文三尺七寸あり電頭の
側ハ應永二十一年午三月廿日と彫あり

按小應永鐘の銘ハ永元亨元年あり凡九十有余年後の年号あり
と云く應永の項乱世を恐れ之土中へかき埋めし其年号月日を刻



ヤ
 八幡不知木林
 ヤ
 八幡宮
 ヤ
 八幡宮

傍に石碑を建つ何の得れなるやを知らず

高石明神社 八幡より東の方佐倉街道鬼越村深町の入口道より

左の岡あり別當八日蓮宗あり泰福寺と号し祭礼ハ九月

九日なり土人傳云當社ハ里見安房守義弘の弟南總大多木

城主正木内膳亮時徳の墳墓ありと云り

神體ハ劍を帯せ馬上軍神の像なりとの

注進の状ハ幡庄内あり高石神村の地を寄附せり又同年二月同胤貞上人へ附せり證文中ハ幡庄高石神南方中島内坪前ありとあり

安房須明神社 同所中山の北池田とあり北の岡あり傳云

里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりと云

今淡島明神と云 今様歌の

北条五代記ハ里見長九郎弘次生年十五歳初陣なり

松田左京亮康吉追うけ斬り

落し既首を取むせりと容貌美麗なり花の如き少年なり

前髪を削りて

引前ハ携りて故なりと云

葛飾志云昔ありの浦ハ盗賣のあり

武時此所を通り

道端ハ古き獨獲の

跡あり

昔ハ此時あり

今幸ハ是を

其所今

來ハ

此時既ハ七月孟夏

此時既ハ七月孟夏

正中山本妙法華經寺 船橋街道の左側あり

日蓮大士最初轉法輪の道場あり一本寺なり

中興八日祐尊師

鎌倉大草紙云... 宗祖三井寺にて討死... 法苑の学道ありて下徳國中の法花経詩の中興山あり... 堂建立ありて五重の塔婆を建て... 中興山ありて吉野へ移り西征傳軍の宮の... 九州より下向し肥前國松玉山を建立して徳州の中山を引未代迄此所を中山と西山... 一寺と号せしあり

祖師堂 日蓮上人の像を安んず 日法師の額 祖師堂 太虚庵光悦筆

祈禱堂 同所後の額 祈禱堂 筆者不知 法華堂 洞左不ありて大七手刻の... 置此祈大田来明の宅地なり 来明日常上人の教を受自の宅地を轉して佛宇とし... 正中山本妙寺と号せし則此堂八其項宮建せし所の傍ありて世俗云飛驒匠作と云... 法苑と當時宗祖大士最初撰法 額 光明法花経寺 光悦筆 堂内外傳の家帯... 宗祖大士より常忍へ贈りし所の消息の写しを板に書く掲ぐ其文云く

法華堂 在せし頃一四菩薩の像と共に彫刻ありしと 経藏 祖師堂の前... 毎月十七日の夜遊在りし道俗系縁す

竜淵橋 堂前の流は常昌堂 唱題念りあり常は 泣銀杏樹 常唱堂の... 真間私法詩の詞山日頂上人の日常上人の子なりて父の勸氣を授け思願を... 祝し能く故に此樹の下に幾回も来りて哭てを帰られしと故に此号ありと

五層塔 同左あり釋迦多宝ありて當寺十八世 三十三番神 社同... 方小寺ありし所あり當寺の護法神とて 寶庫 彫像其外佛經の類ひを蔵む... 毎季十一月八日火焚祭を修す

支院三十六字 今破廢せしものありて 二王門 額 正中山 日等上人筆... 或は光悦の筆なりと

中興開山日祐上人墓 徳門より内左の方小路を入り二丁より西の方山の中... 奥の院 方丈の構の外右の方の小路を入り三丁より東北の方あり文應元年... 宗祖大士此境にあそむる頃富木常忍宅地一字を以て法花堂と

開山日常上人石塔 同所道を隔て左の方あり石塔の上は草堂とて... 常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本代傳... 其の中は往古大士手刻の土を以て堂を造りて聖人のあまうけを立られしとありて此と

蓮山法花経詩の回廊なり時蓮上人は小屋形の後小まより百間よりその理を築... 十二世の住僧日珠上人此地を封して法華一万部の経家を築き古より室蔵し... 安置せし日法上人の作の宗祖大士の彫像をうのりてそのものなり

進上 富博入道 眞書ハ室庫に収む世に後四巻とて造りて云信くその是なり... 鬼子母神堂 同左あり此鬼子母神堂ハ鎌倉の某の堂ありしを後せりといふ... 十月廿二日 日蓮判

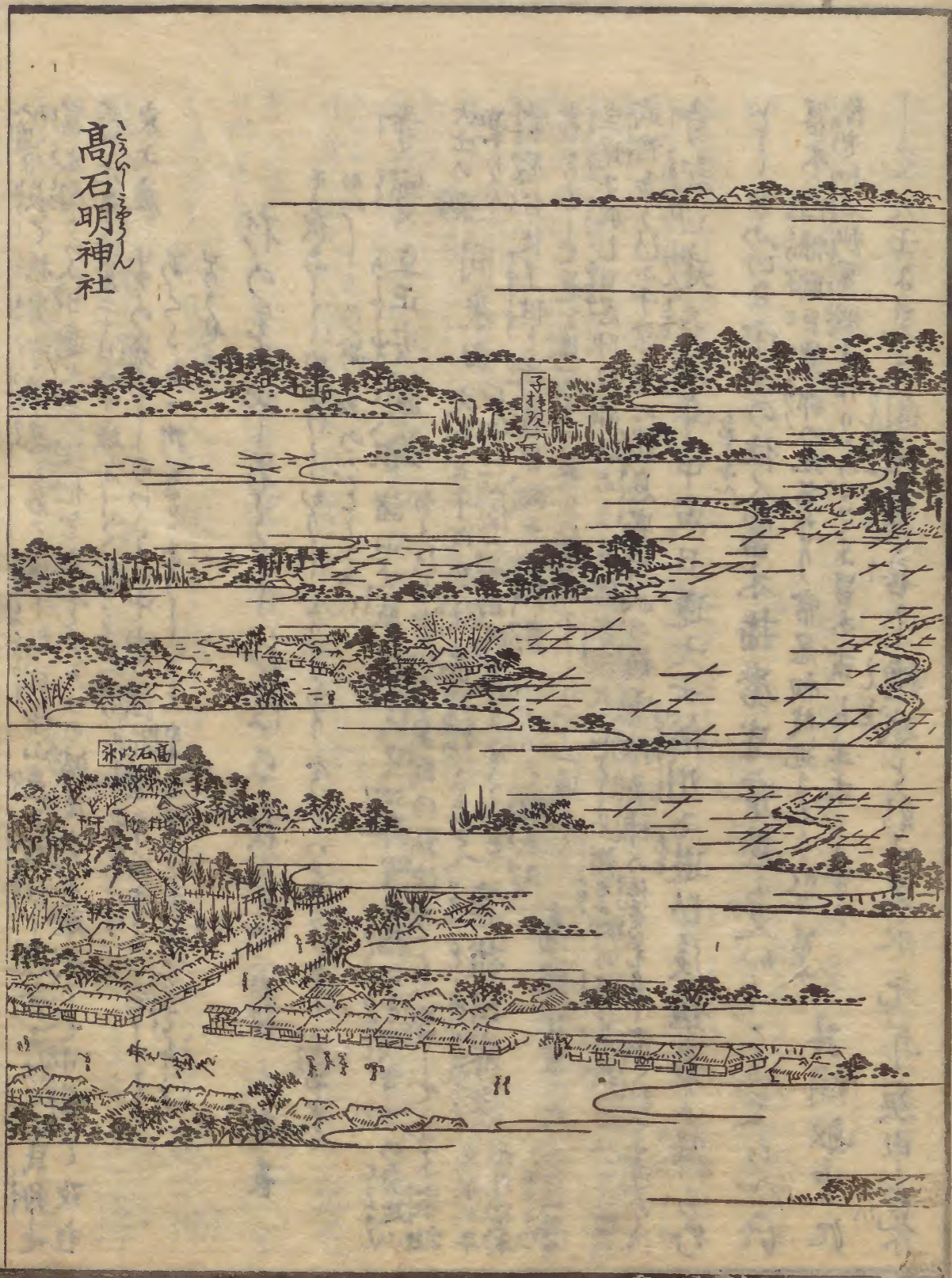
東土産 杉の 系や あじの 後乃 此 宗長 月



寺 經 華 法 妙 了



高石明神社



其二



か道と長て播磨守常忍と名く後下総國中山邑に移住し鎌倉に仕へ土民稱之
富本初より日蓮大士の法化をたやみ大士の滅後竟小難澁して日常と改む
正安元年三月二十日八十歳なりて化すと云ふ
東土産 其の遺を中山の法華堂に納めし一者
あつたは一州をありしと云ふ
まうせ

杉のまやあ~~~~はほのねまの月 字長

寺寶立正安國論 諸山小蔵を承て四部なり洛の沖國寺甲の身延山
常忍台使了性と法義と論せり性竟小居が富木氏
書を奉し是を告同十月朔日の返書中二十二通あり 高祖日蓮大士真骨
武將ありひふ千葉家の消息寄附状の類靈佛天神の徳を多々悲く記す違ふ
寺記曰建長六年甲寅日蓮大士徳州小遊以後鎌倉に帰らむ

と一あめの日中山の住人富本播磨守常忍も又かこふ至らんと
富本因幡國巨濃郡の地名なり常忍初彼地あり故富本と
稱む和名抄罵賊は作り今こふ富本或は土木とす 其間船中に
しく大士よ見え聞法隨喜し擅越とれる文永元年庚申竟小

宅地を轉しく一字を營み大士をこふ居らしか此時一百日
の間大い説法あり又大士自親一尊四菩薩の像を彫刻ありて
かこふ安置し法華堂と號けり 中山記云く宝庫に一尊四大士の木
菩薩形あり皆大士の手刻と云く此法華堂とのハ 時小曾谷教信 教信姓を
大士最初轉法輪の道場なり今奥の院と稱す 秋本太郎兵衛 秋本氏より
左衛門と稱す法名ハ法蓮日禮と唱ふ當國曾谷小住也 平氏次第
後宅地をありて梵刹と一曾谷山法蓮寺と号く 及ひ太田兼明等来く擅越を
白井の人なり子孫小至り其地一字を 及ひ太田兼明等来く擅越を
創敷く白井山秋本寺と号く 兼明ハ五帝を爲し府と稱す當國中山民部以捕鹿連の子なり曾富木氏の
なる 論導をせり大士の宗化小帰一子を授く出家せしむ日高上人是こ
後中老僧日高尊師父兼明卒むその後日蓮大士の命に應じ
日常上人の教を受其家を改く精舎と一正中山本妙寺と號む

今の正中山 亦先の法華堂を合て一寺と一正中山本妙法華経寺
の地是なり 則日常上人を岡山と稱し日高師を第二世とす然小佛
と号す則日常上人を岡山と稱し日高師を第二世とす然小佛
心院日現師 當山 十二世 台命ふより寺法を更りより已降
京撰より輪番して當山の貫主とあれを毎年三月十三日より同

心院日現師 當山 十二世 台命ふより寺法を更りより已降
京撰より輪番して當山の貫主とあれを毎年三月十三日より同

十九日に至るの間法華經千部讀誦七月十五日相撲毬を十月
十三日八日蓮大士の忌辰なるやより大法會を設く近國の道俗群衆
一と大に賑へり

若宮八幡宮 奥の院の地より一丁をかり東の方叢林の中より富木

氏の鎮守の神なりとの事 中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日高師より計
葉介貞胤へ贈られしなり 自前の文云く所々堂宮田
地等之より中畧若宮御堂中山坊若宮別當職ありひ小彼岸田谷中下畧云又同什
物正安三年日高師を深られしなり 若宮持佛堂の本と稱せり首題の懸幅あり
然れハ其頃ハ別當職を別小附置く崇敬尤厚なりとあり

妙正池 中山より北の方二十町を隔て千束村とのふあり 千束
邑は

あふふ千束
の池とも号く 傳云文應元年庚申日蓮大士 年三十九 富木常忍常忍 假まが
所の法華堂より入あり一日の間妙法輪を轉し群生を教導
あり一頃此所の池靈婦女と化し日々彼地に至りて大士の説法を
聴受し信心衆を越え一時彼婦女来り大士に向て云く妾今
尊者の法施を冠り一乘の真因を得んと願くハ大士手書の

本意及び自の法号を賜はん事を乞大士乃曼荼羅をひの
又妙正との法号を授めり婦女喜んで去人怪むて跡は隨ひ至
る此池辺より其婦女の姿を見失ふ然も其本意忽然と一と
傍の櫻樹の枝にかりてあり衆人奇とせり於て此池の靈なる
事を知て妙正と号け後一社は奉まるとり 其婦女往還の道を曼荼
羅小路と字し或は蛇

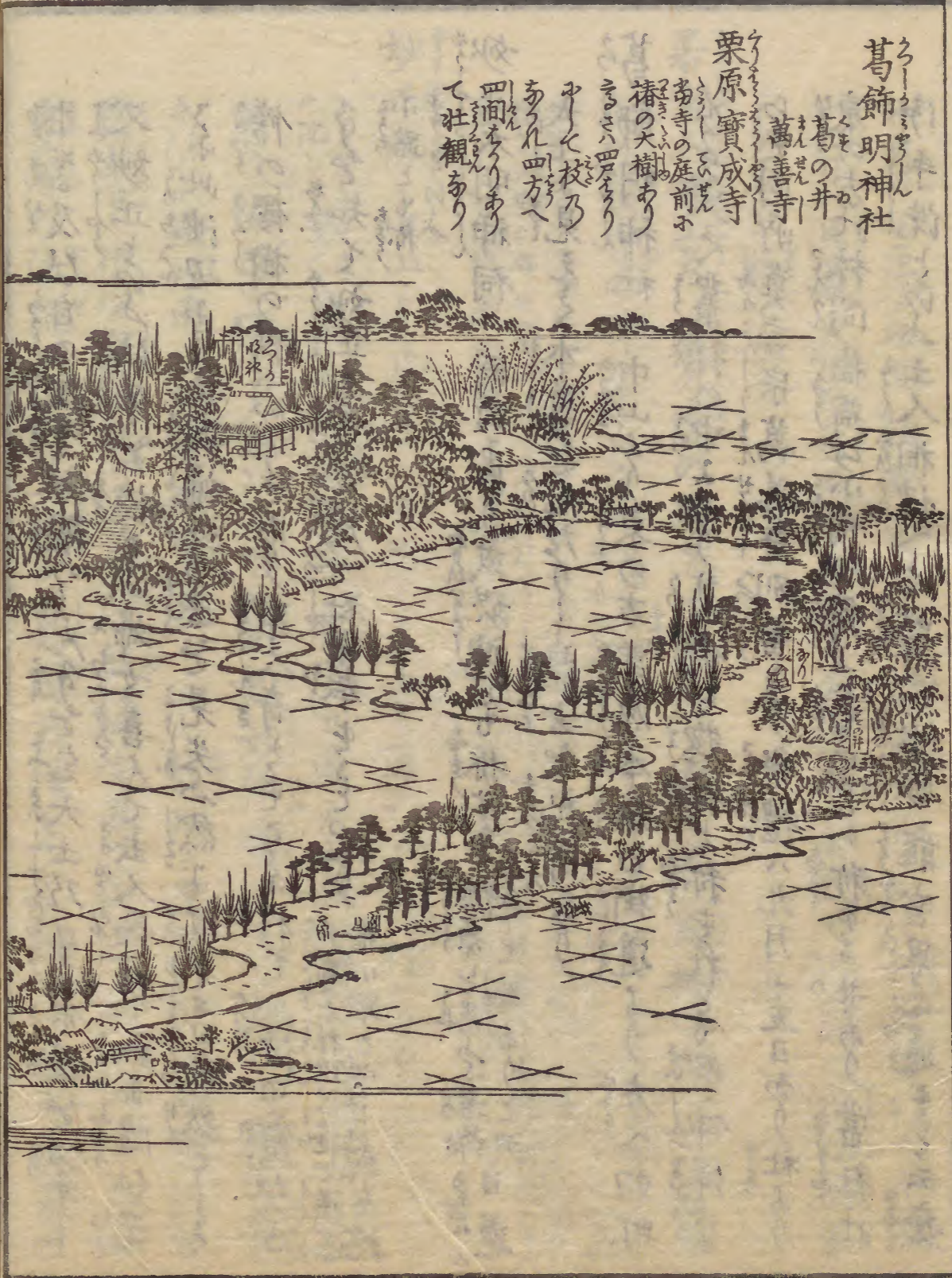
妙正大明神祠 同所あり或姥神とも稱せり 疱瘡を患ふ者祈
念して験ありと云 日蓮

葛飾明神社 中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町

ちり入る叢林の中より葛飾の惣社と稱せれとも祭神詳な
らむ同所真言宗萬善寺別當より祭禮ハ九月十五日あり社あり
東の方此林間稻荷の小祠の傍より葛の井と稱せり井あり當社此
井手洗とのみ土人相傳へて此井の水脈龍宮界不通と云瘡



葛飾明神社
 葛の井
 萬善寺
 栗原實成寺
 栗原の庭前
 権の大樹あり
 言さ八四をり
 中々枝乃
 あれ四方へ
 四間をりあり
 て壯觀あり



疾を患へ者此井の水を飲み驗ありと云へり
勝間田の池 同所船橋街道の道傍にあり此所も栗原本郷村
の内なる所上民本郷の溜池と唱ふ池より東に寺内村と云池あり
西小高と云ふ熊野三所推現の宮居あり萬善寺より兼帯
祭祀を祭禮ハ九月十五日なり

新田部新王
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
右或有人聞之曰新田部新王出遊干堵裡御見勝
間田之池感堵御心之中遂自彼池不忍憐愛於時
語婦人曰今日遊行見勝間田池水影濤々蓮花灼
々可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌專輒吟
詠也

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌專輒吟詠也

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌專輒吟詠也
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌專輒吟詠也

新田部新王
干堵裡御見勝
不忍憐愛於時
蓮花灼々
可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戲歌專輒吟詠也

千載 二条大皇
後拾遺 大后宮肥後
范永

新撰選 寂然

舟枕 小人

夫木 頸伸

家集 為相

日 為相

夫木 為相

日 為相

家集 為相

日 為相

新撰六帖 和家

勝間田池
栗原本郷邑の
地あり故に
本郷の溜池と
号く

万葉集

かみまき池

池

われ

ちちす

あし



あつみ

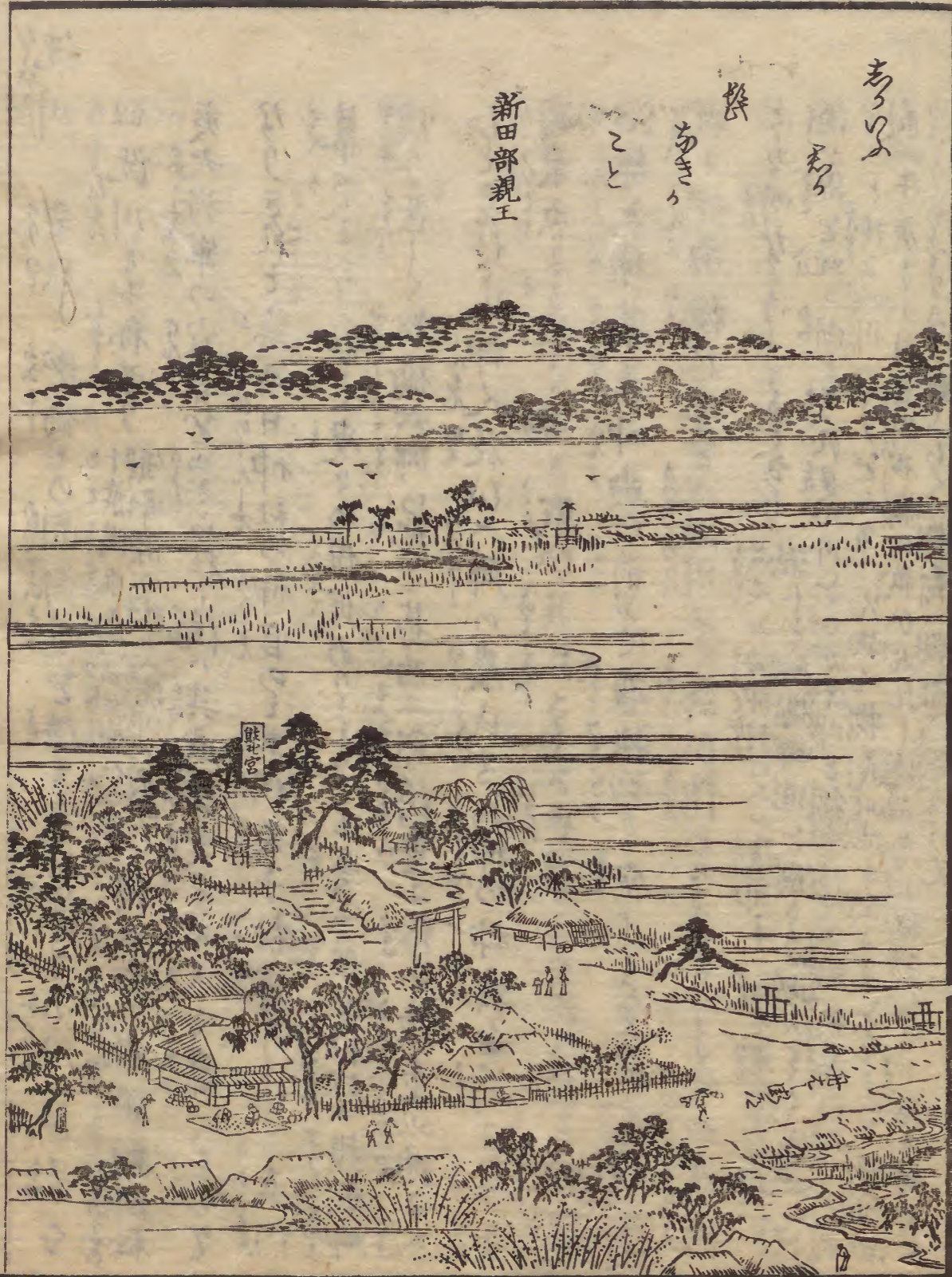
あつ

池

あき

こと

新田部親王



洗川

栗原と船橋との間街道を横きりて流る小川を号く

血洗川とも称せり千葉満胤意富日神社へ神傳云右大将頼朝卿征

夷大將軍の宣旨を蒙られ後其威勢実ニ草木も靡くを

なりされと意富日神社の神官の累代天子勅宣ありて武門

幕下よりあはれを度々の催促ありし事も是に應せし故に頼朝卿

憤り甚しく船橋六郷の地を葛西三郎清重に給ふ清重此地に入

むとせれとも神人及び六郷の農民等三神の神輿を前より昇居

西栗原より支へて防ぎ戦ひ其乱さす止らざりし終に神官

治部太補基義神輿の前より腹掻切て空しくありぬ時乃

戦は神輿穢れざるを以此川を洗ひ清めりしりし血洗川

とを呼ばりし事あり或人云海神村の入口浅間より東の方の山より

流ハ源を蛇ヶ端と号は是小川を太が洗川と稱せし云源頼義の太が洗水

なりと按よ此川のつらと云あるん故に又頼義此地に至るを頼朝治

兼四年庚子十月豆州石橋の戦ひ敗れ後安房上總を徑て下総の國府に

阿須波明神祠

西海神村あり禪宗大覚院奉祀を娑竭羅

龍王を祀ると云故に此地を海神耕田と道路とを隔て海汀に向く

華表を建る九月日を祭祀の辰とす此日芋を食むを旧例とす

故に土人芋祭と号あり当社に小柴をとりあり旅人とて

長途の安全を祈りまゐりしと云侍人奇林良林は下総國阿取波宮とまは社ハ

神の誓ひひやく小柴を立くおとすありと云と云

爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波

伊波々牟加倍理久麻豆爾

新子載 名寄 今もいふかへさあやむるあすへの宮不少果さひよ 後頼

石芋 當社の入口にあり里隣に云く往古弘法大師東國化度の時日され及び

ありく是を許ししうめをす大師邪見の輩を教導めん方便もその家の

傍の芋を加持して石とせしめを此は不其芋四時とて不腐れす一七年年と

生ずと云あり

意富日神社初鎮座地 船橋驛舎の入口海神村御代川氏某

地はあり日本武尊此海上中々八咫鏡を得多し伊勢太神宮

の正體と鎮座あり旧跡なりとの入今意富日神社の地より此

昔ハ濤川ハ作ラズ深ハ水の深キを以テ訓義ヤク日本武尊を導キ其子孫今猶連綿

夏見厨 海神村の北の方より今東夏見西夏見と唱へ二二分

古伊勢伊弉神の神領なり意富日社の神主是を務たり

神鳳釵曰 伊勢太神宮造替遷宮事曰食米處々
注文 二所太神宮御領諸國神戸御厨御園神田名田
等合 下總國 夏見御厨 上分布三十段口入三十段一名船
橋二百丁 神鳳抄其餘下總國わく相馬遠山形葛西猿蓑菅田神保等共合せ五箇
所より意富日神社傳より万葉集よ

爾保村里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能



意富日神社
舊地

天道念佛

船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の

薬王寺等の境内に於て執りせり毎歳二月十六日始り同十八日

終る昔ハ一七日の間執り堂前小土を以壇を築き竹を以柱を儼

これを梵天と稱し其四方に四の門を開き四八柄の神幣を建注連

を引し各々皆悉く諸の佛天を表し内大日如来の像を安し

平素と一旨味の飲食を供養せり詰衆の道俗ハ各一昼夜此

間六度つ垢離して浄衣を着し白布を以て造る所の宝冠を頂

き三宝諸等の沙号を称へく敬礼し六根懺悔の文を唱ふ又其間

中々弥陀の称号を唱へ鉦太鼓を打鳴し梵天の四方を右繞

り救回昼夜に間断なく相傳ふ往古弘法大師出羽國湯殿

山を始り踏分ちひ一頃同國山形の東南天道村との地に於て

これを開闢し興基とてこハ五穀成就の爲の形あり

と云なりハセり

遠

船橋の沖にあり俗釜淵と号く土人の諺云昔平

将門の愛妾桔梗前将門亡びて後ハ流石に都へ歸らむも物

うりて船橋の里に暫しやまひ終り此海底に身を沈りしと

なり此海の漁幸あり其魚と序膳料とて江戸へ運ぶ昔

神宮へも指すあり故に此辺の海濱と津菜と浦と名つくと又船橋太

社説は此海に産する魚の多くを此邊の海濱と津菜と浦と名つくと又船橋太

あり船の腮は此の形ありと云船橋宮神殿の傍に海濱に映し自然に魚を産す

大峯山慈雲寺 同所二丁あり北の方新田にあり五山派の禪窟

あり鎌倉建長寺第二世佛光禪師開基の精舎あり本寺

釋迦如来ハ行基大士の作服士ハ文殊普賢等なり昔ハ盛大の

寺院あり一ハ永祿年間里見義弘ハ兵火に罹りて灰燼と爲

又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ棄れしと謬り利根

川へ沈りしと今其處を字し鐘淵と号し國府臺の条

宝曆中徳巖とて禪僧

舟ハ鐘を造ると云

意富日神社

意富日古八日と比よ作る天正以來

船橋驛上總海道

成田海道との岐道五日市場村に宮居す世に船橋太神宮
と称せ延喜式内の清神や一々関東一之宮と崇む神官大宮司

富氏奉祀せり

當社大宮司富氏の始祖は景行天皇第四の皇子五百城入彦尊あり天皇を
して船橋より下向なされり初に東國八千八村の縣主萬當宮の神官を司りし
多入然は仁平の頃流木田滿國の舎弟基國を養子とす其後基國の時又嗣
あきふ依く十葉滿胤の子基胤と養子とす此時日月を以て家の紋と
せり天正十九年辛卯大神君當社清泰指の頃神官富氏御紋の軍配
團扇より根引の若松を添て献りし後上意より若松を軍配團扇と
家の紋とす隔年三月年始は旧例に任せ清夜大麻は根引の若松を添て献上
しなり登城をもとて永規とす

本殿祭神

天照皇太神宮
豊受皇太神宮

二座相殿

左八幡太神宮
右春日大明神

延喜式神名記曰

意富比下總國葛飾郡二座

三茂侶神社

貞觀五年五月二十六日戊子授下

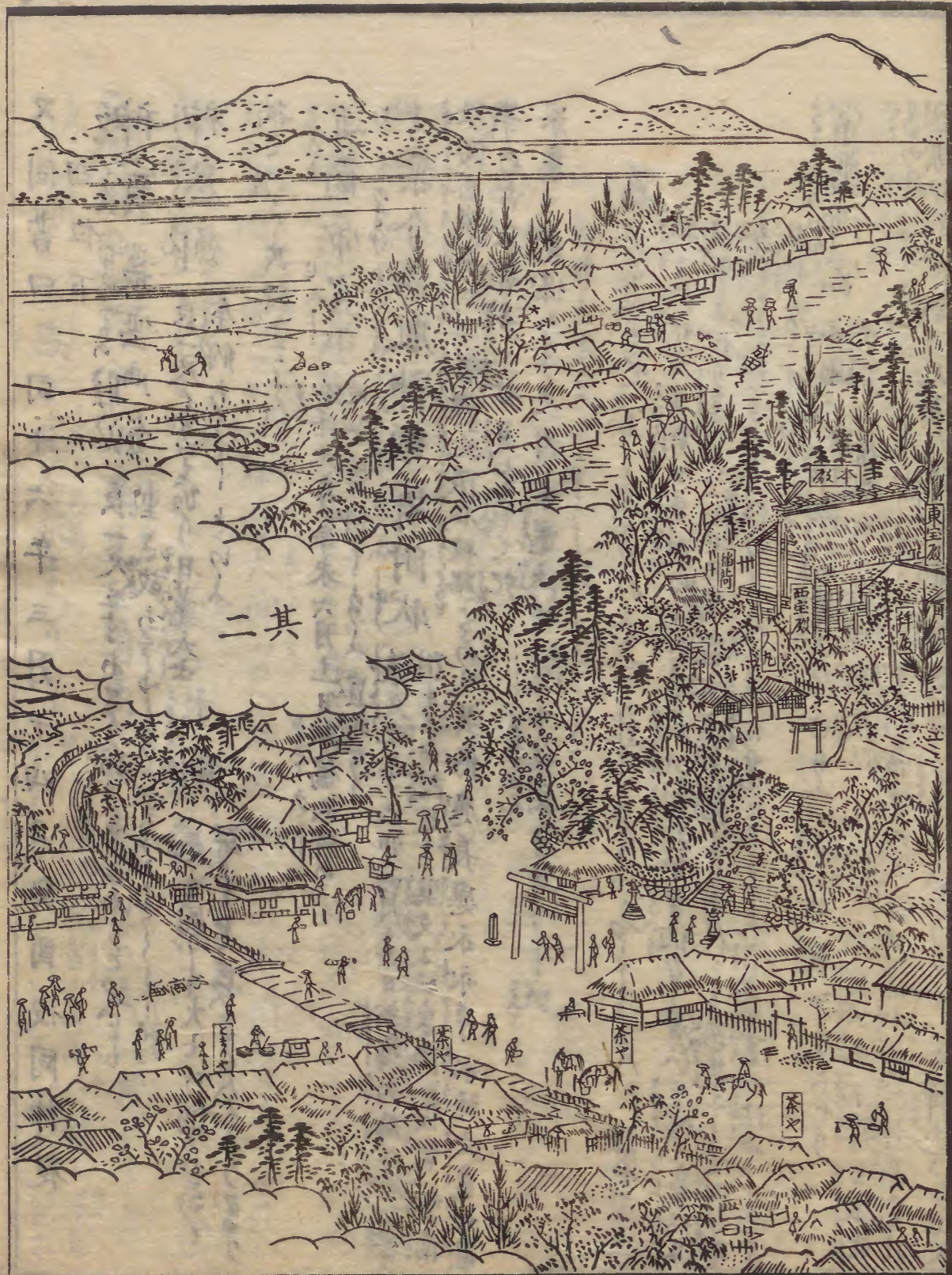
又同書曰

五位下意富比神正五位下
四月三日己卯授同神正五

船橋

意富日神社





又同書曰 同十六年三月十四日 癸酉 授同神後

神寶 叢雲御劍 長一尺五寸 ありのり 来由ありと云ふ

神息劍 長一尺 ありのり 日蓮大士 木劍 是も同大士の納らるる

近衛帝宣示 平元年辛未六月十日 船橋六郷の

千葉介満胤神領寄附状 兼久元年己卯四月十六日 船橋六郷の地を寄

限海西限洗川并碓懸北限石枝路とあり 其餘應長應永永亨永祿文龜元龜

家集 建保六年十一月 素還法師 下後園と云ふ

常盤御宮 本殿の右神林山の麓にたせぬ 四方は陽雜と鏡らせり

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び 大將軍秀忠公御木像 日本武

愍敷伊勢守基治天海大僧正と云ふ 勸請なり 其由来ハ其憚ありと云

と云ふ 我々毎歳四月十七日 祭礼す 都鄙の来りて 敬拜せ 同夜近甲の童

如集り 廣前より 天正九年 辛卯 當社 御祭宮の俗とあり あり

と云ふ 初負脊ハ 初穂 稻と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

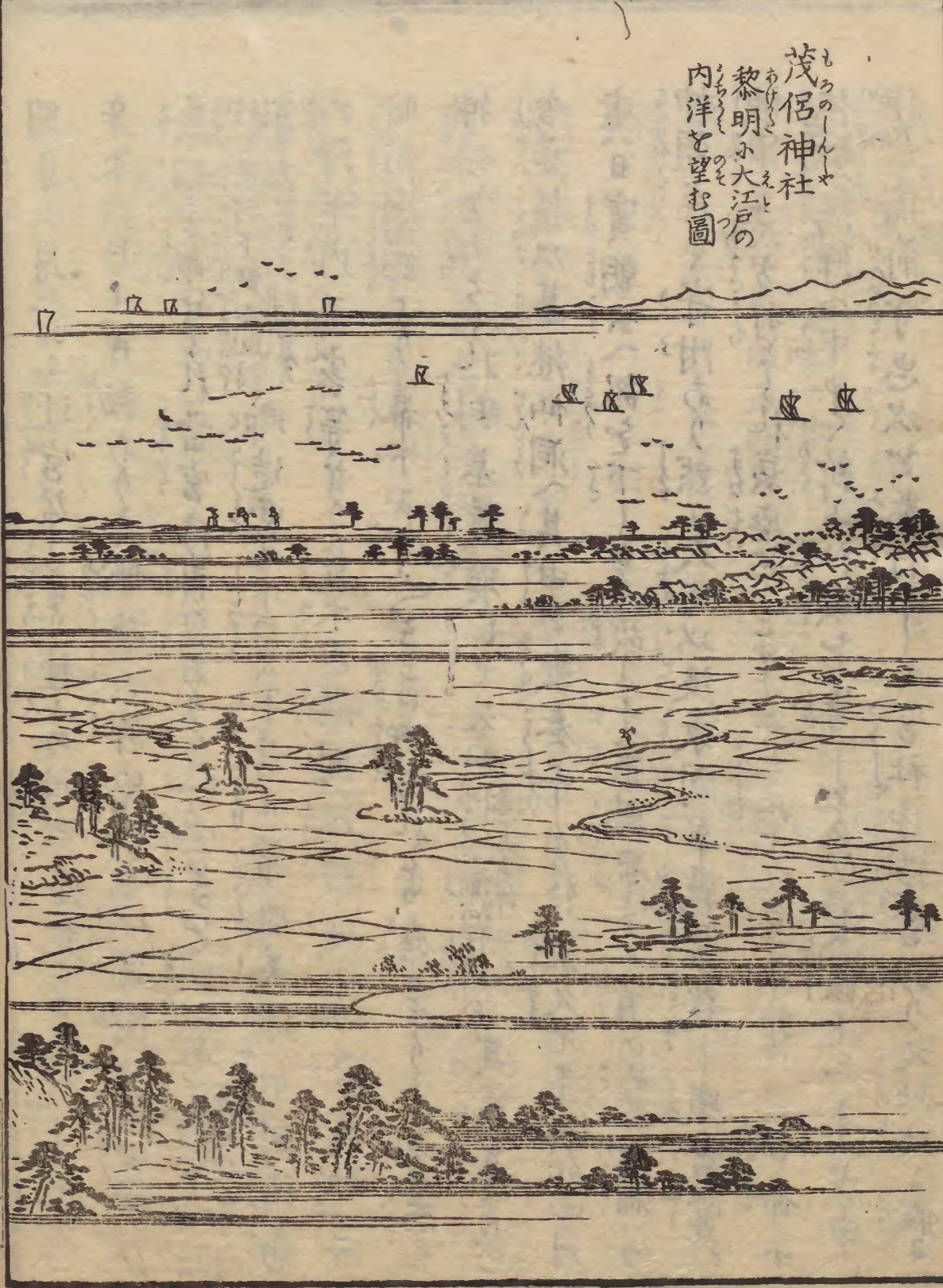
稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ 稲を初穂と云ふ

あふひの
意富日神社
九月廿日祭祀之圖



あつひ海上の光りあつての影を承りて者と云ひあつてを承りて今も
九日市場村に存せり同時凶徒調伏の神矢を刺し者を知刺とよひ
其後裔海神ありて今も此神一時邑君に祀りて
我を是伊勢國五鈴の川上より天降る神あり今より其神垣と
等しく崇へると云云依尊其由を帝に奏しあひて伊勢太神宮を
朝日宮とありて夫と對して當宮を夕日宮と稱しあひて天皇第四の
皇子五百城入彦尊を以て船橋より下向あつて東國八十八
村の縣主兼當宮の神官たりて當宮神宮其年新嘗の祭を行
つて後豊受皇太神宮を合祭し二座とて又左右は八幡春
日の両神を勧請ありて三社とせ其新穀を祀りて地を今も清和天皇の
貞觀十三年辛卯三月三日勅願ありて奉幣使下向ありて関
東一之宮の跡を賜り同十六年甲午四月十四日再勅使下向ありて
天下泰平五穀成就の祈念を命せむ天喜三年乙未源頼義
朝臣同義家朝臣東征の時寄願ありて當宮を修造ありて

同年六月六日遷宮なり種々の神室を納らる又仁平元年
辛未六月十一日勅ありて船橋六郷の地を寄附の院宣を以て
義朝に命せしれ當宮再興ありて神室を収らる六郷の祈禱
村七熊村下飯山間村御造宮の下司八十葉介常胤美濃前司清高
金曾木村夏見村等なり荒木田満國奉幣使より基義神主の
大澤平内兼家等なり時頼朝卿より幕下より加へて肯仰あれとも應せりて八悉く
神領を打ちしれ刺基義腹切て失ぬ其後基義の
舎弟権及基継仙洞へ其由を歎奏上し其れ八兼久元年己卯四月
十六日實朝公へ詔を下し故に千葉満胤より昔のめく六郷の
神領悉く寄附あり然る天文以後東國争戦屢發一頃當宮此
神領も大方打しれ衰廢せんとせし天正十九年辛卯 台命ふ
依船橋郷の中より新小社領を寄しあひ慶長十三年戊申
伊奈備前守忠次を奉行して宮社修造あり又此地は假



もろのーんや
茂侶神社
黎明大江の
内洋と望む圖

伊弉諾を建させし時としてこふ入伊弉諾ありし伊弉崇敬尤厚く
御武運長久の御祈禱を命せしる始ハ神官富氏の家を假の伊弉
館となしあひしう伊弉崇を
建あやかり神官の家を同所田中とて地へ移し住りし貞享の頃伊弉
官堂の伊弉ハ神官富氏へ賜りしやうり再ハ元の社地へ移り住りし
伊弉と唱へ宝曆十一年辛巳勅許ありし古往の例に任せ毎歳
鳳瀾は伊弉後をささるうとハなりぬ

當社の祭祀多き中やも正月十六日の伊弉神樂二月卯日の五
穀成就の神樂殊に九月廿日ハ大祭やも其式甚古雅なり
前の日ハ角力興行あり此後ハ天正十九年辛卯

東照大神君當宮へ伊弉泰宮の時 上覧ありしとあり其余の伊弉
ハこふ伊弉せり
茂侶神社 意富日神社の摂社やも同所より六丁計を隔て

東の岡もあり祭神ハ木花閨耶姫一座なり故に浅間山乃号
あり當社ハ延喜式内の伊弉神やも葛飾郡二座の中なり伊弉手
洗池あり今ハ民家の地に入或人云茂侶神社ハ同郡小金山栗ヶ澤村に
ありし社司ハ交野氏祭神ハ日本武尊ありと云

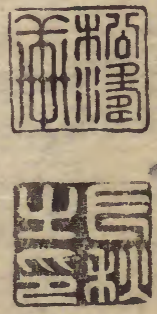
三代實録曰 元慶三年九月二十五日 壬子 授下

此社地ハ海濱に臨たる砂山やも松樹繁茂を西南の方
低く前は南総の驛路を見下し後ハ岡續わも成田の街道
東北に繞る富嶽の白雪房総の翠巒筑波の紫霞も共此地の
眺望に入りし風光最秀美なり例祭ハ六月一日は伊弉
御堂に伊弉の根の善松ハ當社の
地より擇とて旧例とせしり

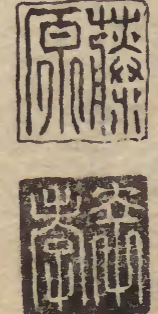


江戸名所圖會搖光下畢

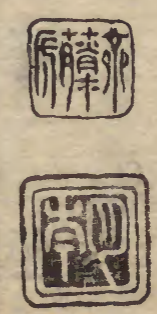
編輯 松濤軒齋藤長秋



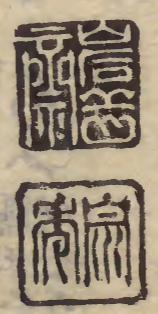
校正 男 藤原縣麻呂



仝 縣麻呂男 月岑幸成



畫圖 長谷川法橋雲旦



副刷 東都

佐脇伊三郎
朝倉伊八
宮田六左衛門

此は東都名所圖會を
加力家定とて三在平
經よりあると云ふに
其縁を述べて總考志の
法を以て科と西美事
ありては

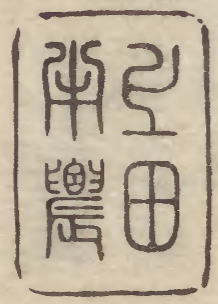
ほふ其の聲をいひおのこ
ち何れ時年よりいかに
さるまゝにわさるゝあひ
お逢ふ家よりあひあひ
ひまはあひあひあひあひ
はあひあひあひあひあひ

自の致造火の由は煙
西よりより木のこゝろ
煙乃先きく馳せたり
そよよのあひあひあひ
物も本接合の部
あひあひあひあひあひ

家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...
家加... 寄... 今... 成...

志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...
志乃由... 檢船...

上田憲憲



荃齋盛義書



拾遺

江戸名所圖會

全五冊

齊藤月岑編述

近刻

長谷川雪旦画圖

東都歳事記

全四冊

全本

近刻

箱根

熱海

温泉名勝圖會

全三冊

藤原縣麻呂遺稿

長谷川雪旦画圖 近刻

同 雪堤補画

天保七丙申青陽

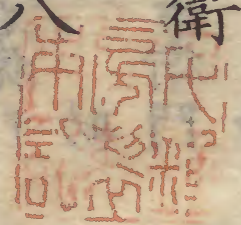
東都書鋪

日本橋南一丁目

須原屋茂兵衛

淺草茅町三丁目

須原屋伊八



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a large square seal impression.

東條書論

京都寺町通松原下ル

大坂心齋橋筋唐物町

同心齋橋筋安堂寺町

江戸西國吉川町木

同 神田鍛冶町三丁目

同 淺草新寺町

同 芝神明前

同 日本橋通二丁目

同 横山町三丁目

同 今川橋本銀町

同 日本橋通二丁目

同 神田通新石町

同 日本橋通四丁目

勝村治右衛門

河内屋太助

秋田屋太右衛門

北島順四郎

和泉屋庄次郎

岡田屋嘉七

山城屋佐兵衛

和泉屋金右衛門

今永樂屋東四郎

小川屋新兵衛

須原屋源助

須原屋佐助

須原屋佐助

三都發

行書林

東條書論

合 須原屋佐助

